

2022年度 ボランティアセンター 年間活動報告書



フェリス女学院大学ボランティアセンター

2022 年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

はじめに	センター長 佐藤 輝	1
フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業		
1. 中期計画(21-25PLAN)		2
2. 2022 年度の活動をふりかえって		3
2022 年度活動報告		
学生主体の企画と連携		
【国際・平和人権】		
アンネのバラ		7
アンネのバラの講習会		12
【地域連携事業】		
学習支援ボランティア		13
NPO インターンシップ系ボランティア (NPO 法人横浜 NGO ネットワーク)		16
寿町炊き出し・夜回り・バザー		17
マリン FM 学生リポーター		18
横浜マラソン		19
演奏ボランティア		21
ジョイントコンサート @横浜緑園高校		23
むかしあそびとだがしや		24
【環境保全・人権】		
使用済み切手・書き損じハガキ収集		25
ペットボトルキャップ回収		
学生スタッフ活動		
第 1 回学生スタッフ研修会		26
第 2 回学生スタッフ研修会		28
大学祭		29
学生のボランティア活動報告		
(1) 学生ボランティア報告		
【演奏ボランティア】		
だんだんの樹での演奏ボランティア	音楽芸術学科 2 年	30
だんだんの樹での演奏ボランティア	音楽芸術学科 2 年	32
【学習支援】		
小学生の学習支援 (本宿小学校)	音楽芸術学科 3 年	35
中学生の学習支援 (このは塾)	国際交流学科 2 年	36

中学生の学習支援（東名中学校）	日本語日本文学科 3年	40
(2) NPO インターンシップ報告		
横浜 NGO ネットワーク（国際協力）	日本語日本文学科 3年	43
(3) 被災地支援ボランティア		
福島県大熊町でのボランティア	国際交流学科 4年	46
ボランティアセンター資料		
ボランティアセンター規程		47
ボランティアセンター運営委員会規程		49
ボランティアセンター運営方針		51
アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）		53
2022 年度ボランティア説明会 実施報告		56
2022 年度活動実績		58
おわりに	コーディネーター 上條 直美	59

はじめに

～コロナ収束期での「対面」活動の再開～

ボランティアセンター長 佐藤 輝

日ごろから当センターの諸活動にご理解、ご協力をたまわり、誠にありがとうございます。3年間にも及ぶ COVID-19 禍によって、さまざまな局面で人と人との関係性が薄れ、本大学の運営にも種々の過重な影響が出ています。ただし、本報告書でもとりあげているとおり、今年度は本大学の感染防止基本方針のレベルが低下したことに伴い、フェリス大生によるボランティア派遣も多くが現地に赴いての活動を再開できる運びとなりました。さらに 2023 年 5 月からは感染症法上、5 類への変更が予定されており、今後の社会全体のあらゆる面での早急な回復が希求されます。

当センター教職員が 2022 年 9 月に参加したオンラインでの大学ボランティアセンター職員セミナー（主催：ボランティアコーディネーター協会）では、学生と教職員間のみならず地域の関係者様との連絡手段のより効果的な改善や、新たなオンライン活動の日常的な利用可能性について情報提供と議論の場が提供されました。これらの全国の先進事例を参考にしながら、本学でもどのような活動に応用できそうかを模索してまいります。

ところで昨年度にこの場で言及しました、日本が世界「人助け」指数レポートで最下位だったという理由をその後も私なりに問い続けております。この答えのごく一端を示唆する 42 ヶ国の国際比較研究（Romano *et al.*, 2021: *Nature communications*, Vol. 12, pp.1-8）を見つけました。このオンライン調査によると、日本人は他者へ信頼を寄せる指標（協力率）が日本人同士でも、また外国人に対しても最下位となっております。個々人の宗教や収入等によっても協力率は大きく変動する傾向があるため、各国の平均値のばらつき度よりも、各国内のばらつき度のほうが大きかったと総括されてはいたものの、今後、日本がより多様な人々を包摂していく社会に発展していくと期待される中、このままの国民性で本当によいものなのでしょうか、と考えさせられる論文でした。

10 月からはコーディネーターとして再び上條直美氏を迎え、多くの団体の皆様とのきめ細やかな話し合いを重ねております。対面での活動が再開できた今だからこそ、当センターの活動と教育の成果は、派遣受入先としての多彩な団体の皆様のご指導、ご支援の賜物であると教職員一同、改めて感謝いたす次第です。本報告書をつうじて、足元から実践を重ねる学生たちの歩みをご高覧いただければ幸いです。

末筆ながら、皆様のご健康、ご多幸を心から祈念いたします。なお、来年度にはセンター長は交代いたしますが（任期 2 年）、ひきつづきご高配をよろしくお願い申し上げます。

2023 年 2 月

フェリス女学院大学ボランティアセンターの目的と事業 (2022年度)

1. 中期計画 (21 - 25PLAN)

中期計画は大学全体で取り組む「フェリス女学院大学 21 - 25PLAN」の中に位置づけられ、ボランティアセンターとしては、以下の計画を実施した。

中期計画名称	事業名	2022年度の成果
「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実	1. 国内外の課題解決を図る人材育成（学生スタッフ・コーディネーターの育成） 2. NPO 等との地域の課題解決への取り組み 3. 広報・啓発活動の更なる強化/認知度向上と行動の促進・拡充 4. ボランティアセンター活動報告書の作成	1. 学生スタッフ・コーディネーターの育成について、計2回の学生スタッフ研修会を実施。第1回はNPO法人「まいおか・やとひと未来」にて農業体験を行った。第2回はオンラインで行い、学生スタッフが夏季休暇中に行った各々の活動について報告した。 2. インターンシップ系ボランティアとして、NPO 法人横浜 NGO ネットワークに派遣した。 3. 一般学生に対するボランティアセンターの周知は、新入生オリエンテーション時の説明会、秋の講習会、大学公式ブログへの活動報告掲載、学生スタッフによる広報用動画の制作、SNS の発信により行った。 4. オンラインでの活動実施のほか、徐々に対面の活動も増え、例年通り、活動報告書の制作を行うことができた。
社会的課題への取り組み機会の拡充	1. 地域・地方自治体・市民社会との連携 2. 被災地支援の拡充 3. 他大学のボランティアセンターとのネットワークの拡充、プロジェクトの実施 4. 学生によるボランティアセンター及びボランティアに関する広報の拡充 5. SDGs 及び ESD に関するプロジェクトの拡充 6. 国際協力・地球規模の課題への取り組み	1. 前年度に引き続き、泉区社会福祉協議会ボランティアセンターの運営委員を担った。また、泉区と本学の連携・協力に関する基本協定の締結が結ばれ、区役所を通じたボランティア募集が増加した。 2. 被災地支援ボランティア活動補助費の支給を実施した。 3. 他大学との交流は今年度は特に行わなかった。 4. ニュースレターの作成および SNS の発信などを行った。 5. 外部団体からの SDGs 及び ESD に関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。 6. 国際協力・地球規模の課題に関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。
意思決定を担う女性への人材育成	1. 女性のエンパワーメントの推進（アウトプット） 2. 女性を取り囲む社会的課題への取り組み（インプット）	本年度は活動が無かった。 次年度以降、2.女性を取り囲む社会的課題への取り組み（インプット）は、1へ統合し、「1.女性のエンパワーメントの推進」とする。

2. 2022年度の活動をふりかえって

2022年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大3年目で、感染状況は徐々に収束に向かっているという認識のもと、段階的に規制が緩和されはじめました。NPO インターンシップや国際機関実務体験プログラムへの派遣は休止となり、特に前期は活動が制限されることの多い時期でした。

そのような中、前コーディネーターの堀尾藍が5年間の任期を終え退任し、新コーディネーターとして上條直美が10月より着任しました。上條は2代目コーディネーターとして2014年度から約3年間同職に就いており、この度は再任という形になりました。

後期は主として2023年度に向けた体制づくりとして、さまざまな活動の整理、センターの環境整備、学生スタッフからの聞き取り、ボランティアセンターの使命について再確認するための学生スタッフ向け説明会などを行い、改めて学生スタッフの役割や位置づけについて、またボランティアセンターのあり方について再考しました。

アンネのバラはコロナで授業がオンライン中心になった期間、手入れもままならず、高齢となった樹がかなり弱った状態でしたが、手入れの再開、専門家のアドバイスを受けながら学生と職員がともに世話をした結果、かなり状態が改善し、3月には多くの蕾をつけるまでになりました。

ボランティアセンターは、学生のボランティア活動を支えるセンターです。学生スタッフは、職員とともにフェリスの学生がボランティア活動に興味を持つように、自分たちの経験を発信し、ときには一般学生の相談相手となれるよう、成長していくことが期待されています。

(1) センター実施業務

一般学生へのボランティア活動に関する情報提供

- a. 情報提供：大きく分けて、「ボランティアセンター学生スタッフの活動」「ボランティアセンターのプロジェクト」「関係団体等からのボランティア情報」の3種類の情報を提供している。方法としては、学内掲示、センター内資料（関連図書、各種ボランティア活動情報のチラシ等）、HP、SNS（情報提供者 ML に登録希望をした学生への定期的な情報提供等）等を通じて閲覧できる。

- b. 説明会・相談会：以下の説明会をオンラインで開催した。 (単位：名)

	参加者数
ボランティアセンター・バリアフリー推進室合同説明会（4月）	105
国際機関実務体験プログラム説明会（春・秋）	中止
ボランティア活動科目履修相談会（7月）	3
秋のボランティアセンター説明会（10月）対面 / オンライン	5

ボランティア活動の相談業務

- a. 相談業務：例年、コーディネーター、職員および学生スタッフが、来訪者の相談に応じている。開室時間 月～金 10時～17時。2022年度は63名の来室があった。
学生からのメールでの問い合わせには、コーディネーターが対応した。

- b. ボランティア活動科目履修の相談業務

今年度の履修登録者数は次の通り。 (単位：名)

		前期	後期	活動内容
ボランティア活動 2 (90時間)	日本語日本文学科 4年	2		緑園東小学校(小学生の学習支援)、踊り場地域ケアプラザ(中学生の学習支援)
ボランティア活動 1 (45時間)	国際交流学科 2年	1		鎌倉ユネスコ協会 (SDGs 未来塾での活動)
ボランティア活動 1 (45時間)	音楽芸術学科 2年	1		鎌倉ユネスコ協会 (SDGs 未来塾での活動)

- c. 学生スタッフ・コーディネーターの活動支援と研修

今年度は、学生スタッフ6名、学生コーディネーター(2年目以上)25名、合計31名が活動した。

ボランティア活動保険登録手続きの代行
手続き取扱い者数 17名。

学内組織・ボランティア系団体との連携

学友会が大学祭のときに実施したバザーで売れ残った衣類などの寄付先についてボランティアセンターに相談。寄付先などについて助言し、送付の手伝いを行った。

学外組織との連携

- a. NPO インターンシップ(2009年度開始事業)

NPO 法人アクションポート横浜との連携によるインターンシップ系ボランティアへの学生のボランティアセンターとしての派遣は、昨年度に続き2022年度も見送り。

- b. 国際機関実務体験プログラム(2005年度開始事業)

公益財団法人横浜市国際交流協会(YOKE)を通じて、横浜市内6大学(フェリス、明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、國學院大学、神奈川大学)が参加しており、国際機関・国連機関での実務体験活動に学生を派遣していたが、2022年度の派遣は中止。

- c. 他大学ボランティアセンターの学生スタッフとの交流
今年度は実施なし。
- d. 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会
運営委員として参加。
- e. 泉区社会福祉協議会主催による、障がい者との「ふれあい軽スポーツ大会」
2022年度は中止。
- f. 演奏ボランティア
NPO 法人だんだんの樹、および横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園で実施。
- g. 横浜マラソン
横浜マラソン組織委員会主催の横浜マラソンで、競技サポートボランティアとして参加。
- h. 泉区役所を通じてボランティア募集
「家計改善パンフレット（簡易版）」作成に参加。（2023年度も継続）

学外団体への寄付・募金

世界の子どもにワクチンを日本委員会（「NPO 法人ともにあゆむ」を介して、ペットボトルキャップ回収の収益を寄付）

（2）学生スタッフ・コーディネーターの活動

諸団体・組織からのボランティア募集情報やイベント情報などのチラシ、ニュースレター等の整理と掲示

センターへ来訪した学生の相談対応

定例ミーティングの開催（アジェンダ作り、司会、議事録作成等を担当）

外部団体や学内活動との連携

ニュースレターの定期発行（今年度は4月、11月に発行）

研修会を年3回実施（今年度は6月、9月の2回実施）

大学ボランティアセンター学生スタッフリーダーセミナーへの参加（2022年度は中止）

（3）プロジェクト

例年以下プロジェクトを実施しているが、2022年度は新型コロナウイルス感染予防のため、は実施なし。 ～ は継続事業（事業開始年順）。 は旧生涯学習課からの継承事業。

第18回緑園新春コンサート（2003年度開始事業）

NPO 法人だんだんの樹（泉区・高齢者支援）との共催、泉区社会福祉協議会の後援として開催。学内では宗教センターの協力を得て実施。地域との連携事業となっている。主に学

生スタッフの1年生が中心となって、プロジェクトの企画・運営をしている。
2022年度は中止。

アンネのバラプロジェクト (Peace from Anne) (2003年度開始事業)
平和に関するプロジェクトとして、園芸ボランティアや記念礼拝があり、後者は宗教センターと連携して実施している (礼拝は対面とオンラインのハイブリッド実施)。

使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付 (2008年度開始事業)
2022年度は収集のみ。来年度、寄付予定。

ペットボトルキャップの収集 (2008年度開始事業)
キャンパスにてペットボトルキャップを回収し、泉区のNPO法人「ともにあゆむ」を介して、「世界の子どもにワクチンを日本委員会」からワクチンが各国に提供される。

寿町への支援
今年度はなし。

農業プロジェクト (2019年度開始事業)
例年、学内にてプランターを使用して野菜を栽培し、収穫した野菜を泉区内のNPO法人「だんだんの樹」が運営する「子ども食堂」への食材として提供する。2022年度は栽培・食材提供を中止したが、子ども食堂に参加する小中学生へ学習支援を実施。

ジョイントコンサート (2021年度継承事業)
横浜緑園高校 (体育館) で実施。参加校は岡津小学校、岡津中学校、横浜緑園高校、フェリス女学院大学 (音楽学部生3名が参加)。

2022 年度活動報告

学生主体の企画と連携

アンネのバラ

アンネのバラは、本間慎元学長を通して黒川万千代氏（当時、ホロコースト教育資料センター副理事長・故）のご協力を頂き、バラ育苗家の山室建治氏より寄贈を受けて、2003年11月17日、植樹された。この年、廣石望初代ボランティアセンター長を中心に「アンネのバラ育成プロジェクト」が発足し、以来、学生たちの精力的なボランティア活動に支えられ、平和への願いの象徴であるバラが育成されている。

また、植樹より20年近く経ち寿命を迎えた苗もあり、11月にアンネのバラの教会より2株ご寄贈いただき植樹を行った。

「アンネのバラ」は、蕾の時は赤、開花すると黄金色になり、時間の経過とともにサーモンピンクに変色し、やがて更に濃いピンクに変色するという具合に、色が変わっていく。さまざまに色を変えるバラを「アンネのバラ」として選んだことには意味がある。

アンネは豊かな才能を秘めたまま戦争と民族差別のために、若くして命を奪われた。そんな彼女が生きていたなら、その才能を活かし、人生において幾つもの美しい花を咲かせたに違いない。多彩に変容する「アンネのバラ」には、多くの可能性を秘めたアンネを表現し、平和を祈るといふ、このバラを作出したベルギー人園芸家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏の願いが込められている。

1971年、大槻道子という日本人がオットー・フランク氏と奇跡的に出会い、翌年のクリスマスにフランク氏からバラを分けて頂いた。その後、山室隆一氏にバラの増殖が託され、隆一氏が亡くなられた後はご子息建治氏がその栽培を受け継ぎ、アンネのバラは「戦争のない、平和な世界に」というアンネの願いとともに、日本全国に広まっている。



6月22日 アンネのバラ記念礼拝
で配ったポプリ



11月22日 アンネのバラ植樹記念礼拝

【アンネのバラ礼拝】6月22日(水) 緑園チャペル/オンライン/オンデマンド

奨励 コミュニケーション学科 1年

「光の子として生活せよ」

エフェソの信徒への手紙第5章8節、「光の子として歩みなさい。光からあらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。」という聖書箇所からきた、私が通っていた高校のモットーです。

三年前の四月。桜が舞うあたたかな春の日。私は光の子になりました。

「光の子」ときいて、それは何だ、という方が大半でしょう。実を言うと、私もよくわかっていませんでした。「光の子」は、人それぞれの解釈があり、その意味を自分で考え、実行する三年間にしてください。というのが、高校の方針でした。

この高校に入学すると決めたのには理由があります。

キリスト教が好きだから、とか。推薦で行けるから、だとか。知り合いのいない高校に行きたい、だとか。いろいろな理由はありますが、決定的な理由は中学の時の担任の先生に言われた、「聖書が求めている言葉を与えてくれるかもしれない」という一言でした。

もちろん宗教勧誘ではありませんし、私はクリスチャンでもありません。私は高校三年間を、「自分探し」にあてたかったのです。

というのも、「自分の意思があったとしても、他人を優先し、その人が望む姿になる」ということを続けていたせいで、「自分」というものがわからなくなっていたのです。

あの子の前ではあの私。あの人の前ではこの私。無意識にやっていることとはいえ、いつの間にか「私」というものが壊れ、先生に学校に来ることをとめられたり、ほぼ毎日カウンセリングを受けていたりしました。

聖書がもしかしたら、私の救いになるかもしれない。

そんな考えのもと、無事第一志望の高校に入学することができました。

結論から申し上げますと、聖書は救いではなく、出会いでした。

宗教同好会、といういかにも怪しい部活に所属しました。

宗教同好会の活動内容は、宗教の掲示板の飾りつけ、旧修道院の清掃、芝生のお手入れ、御ミサのお手伝い、オープンスクールの宗教の授業のお手伝い、そして教会や病院の訪問を行っていました。

宗教同好会は幽霊部員が多い中、熱心に活動しているという子が珍しかったそうで、いつの間にかシスターや神父様、宗教科の教員と親しくなり、宗教の授業、倫理の授業は内山にきいておけばなんとかなる、と言われるくらい。高校三年生の夏には、修道院で二日間過ごすという、貴重な経験もさせていただきました。

自分探しをしながら、光の子を探求する。そんな生活を続けていましたが、高校二年生の夏、永井隆博士の作文に応募する機会があり、そこで出会った言葉にすべての答えがありました。

「如己愛人」

己の如く隣人を愛せよ。という意味です。

この言葉はレビ記19章18節の「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。」という聖書箇所からきている言葉です。

これが、わたしにとっての答えでした。

自己犠牲の精神。他者のために行動する。それは、まごうことなく「自分」だったのです。

そして、これが光の子、という言葉の自分にとってのアンサーでした。

光の分かち合い、という高校で御ミサや式典で必ずやるものがあります。
校長である司祭様がともした一つのろうそくから、教員と生徒のひとりひとりのろうそくに
灯す。といったような儀式です。
ひとつのろうそくの火から広がる、光。
この儀式もまた、「如己愛人」という言葉を表していました。

司祭様がともすひとつの火のように、私も誰彼構わず、光をともす存在になりたい。光を
繋ぐ、懸け橋になりたい。そして、これが「光の子」だ。私はこれからも「光の子」。大学に
行っても、社会に出ても、「光の子」だ。「如己愛人」の精神で生きていく。

高校卒業の最後の作文で書いた決意表明です。
その決意のまま、私は「For others」という教育理念を持つフェリス女学院大学に入学する
ことができました。また、自分にやれることはなんでもやろうという意志のもと、いろいろ
なことにアタックしています。

聖書は出会いです。
高校という環境、そこで出会う友人、先生、シスター、神父様。そして、「自分」。
改めて、一期一会という言葉が、どれほど大切かを気づかされる高校生活でした。

きっと皆さまにも、なにか自分を変えた物や人、言葉があるのではないのでしょうか。
もしなかったとしても、きっとこれから出会うでしょう。
ということ年齢18の私に言われても、という感じかもしれませんが、出会いはとても大切
です。

新型コロナウイルスの影響で、「出会い」が極端に減ってしまいました。
自分がやりたいと思うことが制限されてしまうということも少なくありません。
制限は少しずつ緩和されてはいますが、まだまだあの「変わらない日常」には程遠いです。

アンネのバラが、赤、オレンジ、ピンクと色に移りゆくように、私たちは変化の日々を歩
んでいます。

そんな変化し続ける日々だからこそ、今しかできないことがあります。
生に対する致死率は100%ですから、私たち「人」という生き物がいつ死んでもおかしくな
いように、変わり続ける日々は昨日のあたりまえも今日には違うかもしれませんし、今日の
あたりまえも明日には違うかもしれません。
可能性の話ですが、ゼロではないのです。

最後に私が皆様にお伝えしたかった部分の聖書箇所を朗読して、アンネバラの奨励とさせ
ていただきます。

マタイによる福音書第6章34節より、

「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日
だけで十分である。」

【アンネバラ植樹記念礼拝】11月22日（火）緑園チャペル/オンライン/オンデマンド
奨励 音楽学部音楽芸術学科3年

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」
これは、マタイによる福音書 11 小節から 28 小節に記されている文章です。私は、この言葉に涙を流したことがありました。

今年の4月から9月まで、国内留学のため同志社女子大学に在学しておりました。自分にもっと自信を持つため、広い世界を見るために、一歩踏み出したものの、強気に出た自分とは裏腹に、弱く心細い自分もいました。そんな時、大学内にこの聖句が書かれた掲示板を見つけました。最初は、気にせず前を通り過ぎましたが、何か気になって戻ってみると、自分の中でモヤモヤしていたことが見透かされたような気がして、自然と涙が滴り落ちていました。寂しい！悲しい！という気持ちよりも、自分の心の穴を誰かが埋めてくれるような。誰かが隣で肩を抱いてくれるような安心感に包まれました。言葉ってこんなにも偉大なのかと、改めて考えさせられる機会にもなりました。

私が小学生の頃から、父に教えられていた言葉があります。「勝って驕らず、負けて腐らず」です。たとえ、何かに成功したとしても、そこから何が得られるのか、先を見据えて考える。成功した分、周囲を見渡して、立ち止まっている人に手を差し伸べること。反対に、失敗を悪だと思わず、遠回りでもいいから納得する道を歩むこと。この言葉は、今の私にとっても繋がっています。

私は人と違う道を進み、そこでさまざまな発見をすることが好きです。国内留学も、その挑戦の一つでした。しかし、時には上手くいかず模索することも多い中で、弱い自分でも良いのだという、自分自身を認めてあげる気持ちと、上手くいなくてもそこがゴールではない、これからだ！と言った、二つの気持ちで前に進むことができました。

知らない地で出逢った聖句も、家で聞かされ続けてきた馴染みのある言葉も、どちらもわたしを形作る大切なものです。いつか私も、誰かの心に響く言葉を届け、言葉によって誰かの明日を変えられるような、影に取り残された人たちの光を見出せる存在になりたいです。言葉の偉大さを、自分でも体現できるよう、私自身もありのままの言葉で表現していきたいです。

その手段として、私には音楽があります。何かを想い、作詞して歌うことで、誰かの心に「希望」や「幸せ」が刻まれ、明日が少しでも楽しみになるような。人との出逢いを紡ぎ、誰かの毎日に彩りを作り出す音楽を届けることが、人生の目標です。

音楽だけじゃありません。この世界にあるさまざまな芸術を通して、誰かの苦しい声に気づき、手を差し伸べられる自分で居たいです。そのため、もっと社会と多芸術の結びつきを勉強し、自分のカタチを見つけていきたいです。

言葉は、とても繊細で、強くて、誰かの心を変えられる。
私は、そう強く信じています。

「アンネのバラ植樹記念礼拝および新しい苗の植樹」

(大学HP「フェリスを綴る」より引用掲載)

11月22日、アンネのバラ植樹記念礼拝のひとつときがもたれ、平和への思いを新たにしました。礼拝は6月と11月の年に2回、宗教センターとボランティアセンターとの協働で行われています。また、礼拝の司会、奏楽、奨励、聖書朗読、アンネの日記朗読、フランチェスコの平和の祈りの先誦はボランティアセンターの学生が担当しました。奨励では、国内留学中心細い思いをしていたときに「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。(マタイによる福音書11章28節)」という言葉に出会い、勇気を与えられたエピソードが語られました。

2003年11月17日にアンネのバラの苗が植えられて以来20年、たくさんの花を私たちに見せてくれましたが、バラの木も少しずつ年をとり、枯れてしまったものもありました。そしてこの度、ご縁があって新たに2株の苗をアンネのバラの教会から寄贈していただき、11月24日に学生の手によって植樹を行い、宗教センターの徳田先生にお祈りをさせていただきました。尊い新しい命が与えられたことに心より感謝しています。

コロナの間はなかなか花壇の手入れもままならない日々が続きましたが、バラも命あるものなので、きちんとお世話をしていくことで花を咲かせてくれるのです。これからアンネのバラ再生プロジェクトをスタートさせ、新しい苗も含めて大切に育てていきたいと思えます。



寄贈していただいた苗

アンネのバラの講習会

日時：2月15日(月)9時半～12時半

場所：ウエルカムセンター、花壇

講師：川崎 菜由氏(横浜イングリッシュガーデン)

参加者：英語英米文学科3年1名、国際交流学科2年2名、音楽芸術学科2年1名、
日本語日本文学科1名

佐藤センター長、上條コーディネーター、職員2名、国際課職員1名

(計10名)

2023年4月から「アンネのバラ再生プロジェクト」を開始します。その準備企画として、横浜イングリッシュガーデンの川崎菜由氏を講師に招き、バラの育て方の講習会を行いました。

前半は講義形式でお話を伺い、後半は花壇で実際に剪定作業や施肥をしていただきながら講習を受けました。

講習会後は参加者の交流会を行い、感想を述べ合うなどして交流を深めました。

<参加者の感想>

- ・言葉だけでは分からなかった部分を、実際に目の前で教えて頂けて良かったです！
- ・切る枝と切らない枝の見極めが難しかった。でも楽しかった！
- ・いつもアンネのバラの前を通るたび、どのように育てられているのだろうと不思議だった。今日、剪定などもやったが、とても難しかった！！
- ・プロの方が枝を切っているところや肥料をあげているところを間近で見ることができて良かった。次にお花が咲くのが楽しみです。
- ・ただ水をあげるだけでなく、弱い枝を切ったり、虫を取ったり、色々世話焼かなければいけないので、植物も命なのだと感じました。
- ・土に触るのはいいなー。楽しかった。バラをもっと大切に。でも意外と気難しい。
- ・バラのお手入れを学び、より愛着がわきました。しっかり育てていきたいと思いますし、長く咲き続けてほしいです。

地域連携事業 / 学習支援ボランティア

子どもの教育に関するボランティアは、センターに初回来室するフェリス生に実施しているアンケートでも関心の高い活動分野である。毎年熱意を持った学生たちが、子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら、地域の学習支援ボランティアの現場で活動を実施している。

【横浜市立本宿小学校】

学習支援ボランティア

活動日時：応相談

活動内容：授業中に教室の中で学習支援、障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援、
校外学習の付き添い

対象：小学校1～6年生の一般学級または個別支援学級

ボランティア登録学生：音楽芸術学科3年2名、国際交流学科3年2名・1年1名、
コミュニケーション学科3年1名、英語英米文学科2年1名
(計7名)

【横浜市立岡津中学校】

学習支援サポーター

活動日時：毎週水曜日 15時頃～(50分程度)

活動内容：学習サポート

対象：中学校1～3年生

ボランティア登録学生：2022年度はなし

【特定非営利活動法人あすなる / 瀬谷区学習支援教室このは塾】

瀬谷区生活支援課の寄り添い型学習支援事業

活動日時：月曜日・木曜日 18時～20時45分

活動場所：せやまるふれあい館

対象：中学生

ボランティア登録学生：国際交流学科2年1名

【厚木市立東名中学校】

活動日時：毎週木曜日

活動場所：東名中学校 教室内

活動内容：中学生の学生支援

ボランティア登録学生：日本語日本文学科3年1名

【コミュニティだんだん 学習応援子ども食堂】

活動日時：毎週水曜日 15 時～19 時頃

活動内容：こどもたちの宿題や課題の手伝い、遊び

対象：小学生、中学生

ボランティア登録学生：日本語日本文学科 1 年 1 名、留学生 1 名（計 2 名）

2022 年度学習支援ボランティア活動 ふりかえりの会

2022 年度、さまざまな場所で学習支援ボランティアに関わった学生とともに、活動のふりかえり会を開催しました。

【日時】2023 年 2 月 17 日（金）13 時～14 時半

【場所】オンライン（Zoom）

【参加者】音楽芸術学科 3 年 1 名、日本語日本文学科 3 年 1 名、
国際交流学科 2 年 1 名、英語英米文学科 2 年 1 名（計 4 名）

内容

- 1) 自己紹介
- 2) 各自の活動内容の紹介
- 3) ディスカッション
 - ・活動をしようと思った目的、動機・きっかけは何ですか？
 - ・活動してみて一番楽しかった、嬉しかったこと
 - ・活動してみて難しいと思ったこと、改善したいこと
 - ・活動から得た学び（lesson learned）は何ですか？
- 4) 文科省による学校支援事業について

ディスカッションの内容

- 1) 活動の動機・きっかけ
 - ・中学校の教員を目指しています。中学生の子達は小学校から上がってくる子が多いので、小学校での教育の様子が中学校の教育にも行かされると思い、自身の経験のために始めました。
 - ・教員を志しており、4 年時の実習をより学べる機会にしたい。大学生のうちに学校の現状を把握し、自分の教員適性を磨きたいと思ったから。
 - ・困っている子どもの役に立つことをしたかった。

2) 嬉しかったこと・楽しかったこと

- ・音楽の授業の合奏のお手伝いをさせて貰えたこと
- ・1年生から折り紙やお手紙をもらったこと
- ・昼休みに生徒と話したこと、レクなどに教員の立場として参加させてもらったこと
- ・授業や休み時間などで頼ってもらった時
- ・生徒さんたちとたくさん仲良くなれて、雑談までできる仲になったこと
- ・わかりやすいといってもらえたことが、些細な一言ではありますがすごく支えになりました

3) 難しかったこと

- ・最初は教えることの難しさを痛感しました。
- ・どういう立場で学校に関わればよいのか、先生方もどこまで仕事を任せてよいのか、お互いに戸惑いがあった。

4) lesson learned

- ・様々なことを把握する先生の様子を見て、自身も教員になったら頑張りたい。ボランティアの私にさえも気を使って、これをお願いしますと声掛けてくださる先生もいました。知らない人が沢山いる教室に入る時の抵抗が以前よりも少なくなりました。
- ・自分の知らない世界が知れました。
- ・柔軟性や対応力、周りを広く見渡す力が、少しでも身に付いたように思います。

NPO インターンシップ系ボランティア

NPO 法人横浜 NGO ネットワーク（国際協力オンラインボランティア）

国内外の課題解決に取り組む NGO・NPO でのインターンシップ系ボランティアとして、NPO 法人横浜 NGO ネットワークをボランティアセンターで紹介している。

< 団体紹介 >

国際協力活動の推進のため、横浜及び神奈川県内の NGO の連携のために 2001 年に設立。国際ボランティア講座、ネットワーク NGO 全国会議、かながわ国際協力フォーラム等の事務局を担当。NGO 相談員。

< ボランティア内容 >

HP 作成、国際協力・多文化共生イベントの企画と運営など。

活動時間、曜日：要相談

活動場所：事務所 / オンライン

求める人材：ボランティアに関心がある学生、横浜の課題解決に関心がある学生、長期的にボランティア活動への参加が可能な学生、横浜が大好きな学生

参加登録学生：日本語日本文学科 3 年 1 名、コミュニケーション学科 1 年（計 2 名）

学生インターンシップ系ボランティア募集！
(対面/オンライン)
派遣先：特定非営利活動法人横浜 NGO ネットワーク

単位認定制度あり！
若干名募集！

あなたも一緒に横浜のまちづくり、課題解決に取り組んでみませんか？

特定非営利活動法人 横浜 NGO ネットワーク

国際協力のイベントなどを通して交流のあった横浜や神奈川県内の NGO が、連携してお互いの能力を高め、より広く国際協力活動を進めようと 2001 年に設立しました。NGO が連携し、世界とのつながりの中で平和で公平な社会の実現と神奈川という地域の中の問題解決に向けて事業を実践していきます。
(2008 年 11 月 13 日に特定非営利活動法人を取得)

募集期間：2022 年 7 月から随時
活動開始日：要相談
活動時間：要相談
活動場所：事務所 / オンライン
求める人材：ボランティアに関心のある学生、横浜の課題解決に関心があり長期的に活動が可能な学生、横浜が大好きな学生
活動内容：HP 制作、国際協力・多文化共生イベントの企画と運営など

<問い合わせ先> ボランティアセンター：volunt@terris.ac.jp

寿町炊き出し・夜回り・バザー

寿町は、関内と石川町の間にある簡易宿泊所街である。ここには、失職し、居住地を失った約 6000 人の方々が居住しており、その内の 9 割以上が男性高齢者である。1 泊 2000 円の簡易宿泊所の小部屋に泊まるか、その費用のない人は、外にダンボールなどを敷いて夜を過ごしている。かつては外国からの移住労働者も多くいたが、不況の影響や、日本の出入国管理法による規制強化により、現在はその数が少なくなった。ここには、高齢者の集う「木楽な家」や、種々の障がい者福祉作業所があり、様々なボランティア活動が実施されている。

「寿地区センター」では、炊き出し、バザー、夜回りパトロール活動のほか、学生の啓発と研修のための「寿わーく」が開催されている。「寿わーく」には、学生以外も参加しており、他者と接することで視野を広げることができる。また実際に路上生活者の方々と接することで、現代社会の課題を考える貴重な機会となっている。

【寿町バザー】

ボランティアセンターでは、未使用のタオル、石鹸、使い捨てカミソリを集め、日本キリスト教団寿地区センターに送り、寿町バザーに協力している。随時、生活用品を募集している。

【寿町炊き出し】

炊き出しに参加することで、実際に簡易宿泊所で生活されている方の話を拝聴するなど、交流をはかることができる。炊き出しは毎週金曜日に行われている（今年度も、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染防止のため、学生派遣は見合わせた）。

マリン FM 『radio jack yokohama』 学生リポーター

株式会社 antenna 石川町は、横浜市中区石川町を拠点としてまちづくりに密接した広告宣伝業、マリン FM のサテライトスタジオの運営等を行っており、マリン FM では土曜日に 2 時間の番組を担当。横浜ハンマーヘッドから公開生放送している。マリン FM 学生リポーターに、学生スタッフ 4 名が登録。

放送日：10月15日(土)、11月15日(火)、12月15日(木) (生放送)

場所：横浜ハンマーヘッド公開スタジオ

参加学生：国際交流学科 3年1名・2年2名、音楽芸術学科 2年1名 (計4名)



放送の様子 (2021 年度活動写真)

横浜マラソン 2022

横浜マラソン 2022 では、フルマラソンコース、みなとみらい 7km ラン、車いすチャレンジの 3 つのコースが設定されており、いずれのコースもゴール直前に通過する赤レンガ倉庫前のランパス(ランナーと通行者が交差する地点の交通整理)でのボランティア活動を行いました。

活動日：2022 年 10 月 30 日(日) 9 時 20 分集合、15 時解散

場所：みなとみらい赤レンガ倉庫前

活動内容：ゴールまであと 2km 弱の地点の赤レンガ倉庫前での交通整理およびランナーへの激励の声かけなど。

主催：横浜マラソン組織委員会(横浜市、神奈川県等)

主管：運営協力：横浜市陸上競技協会 / 横浜市スポーツ協会

参加者：19 名(音楽芸術学科 1 年 1 名・2 年 1 名・3 年 3 名、英語英文学科 1 年 1 名・2 年 3 名、コミュニケーション学科 2 年 1 名・4 年 1 名、日本語日本文学科 3 年 3 名、国際交流学科 1 年 1 名・3 年 2 名、国際交流学部交換留学生 1 名、文学部交換留学生 1 名)

【参加者の感想】

1. 参加の動機

- ・横浜で行われる大イベントであり、健常者だけでなく身体にハンデがある方も参加できる、画期的な取り組みだと感じたため。
- ・「ボランティアをしてみませんか?」という掲示を見たから。
- ・今までボランティア活動に参加する機会が取れなかったため、フェリスパスポートでの募集の掲示を見て応募しました。
- ・友人から誘いを受けた。
- ・姉が以前高校生のときに横浜マラソンのボランティアをして、とても楽しかったというのを聞いていたので気になっていました。

2. 感想

- ・午前中は、車椅子走者の方や身体障害を持つ方々の走りを見て、スポーツは誰しにも平等に与えられるものだと思えました。 午後のランナーの方々もですが、たった一言の声援が力に変わる瞬間を目の当たりにし、ボランティアとしての役割を全うできたと思えました。 声かけをする際、ランナー一人一人の顔を見ながら行うことを工夫しましたが、一瞬ランナーと私の間でコミュニケーションが生まれ、その瞬間に、少し涙が出てしまいました。 会場にいる人たち全員が空間を作り出し、誰しものが楽しめる、笑える、頑張れるイベントを徹底して構築している姿に、私もこういうイベントを作れたらいいなと感じました。
- ・決まった動きをする作業でしたが、非常に楽しかったです。応援の声掛けに応えてくださったランナーの方もいらっしゃったため、やりがいも感じられました。

- ・ 普段自分がマラソンなどスポーツにあまり縁がないので間近でランナーの方を見られてとても新鮮でした。応援の声をかけると手を振りかえしてくれる方やお礼を言ってくれる方もいて会場が一体感に包まれていてとても良い雰囲気でした。自分達以外にもボランティアの方がたくさんいて驚きました。
- ・ 大規模なイベントのボランティアをするのは初めてでした。「自分がこのイベントを作り上げる一員なんだ」と思いながら活動するのはとても楽しかったです。ハロウィーンが近い季節柄、様々な衣装で走るランナーを目にして元気な気持ちになりました。こちらの声援に応えて「ありがとう！」「頑張るよ！」と言ってもらえたり、手を振ってもらえたりしました。流石に「横浜サイコー！」と叫んで走り抜けていった人には笑ってしまいました(笑)ランナーとのコミュニケーションは時間にするとものの数秒ですが、そこにはすごく素敵な、温かい時間が流れていました。明日からの日常生活に彩りを与えてくれるような、貴重な経験でした。
- ・ 楽しかったです。同じ学校に通っていても学部や学年が違うと話したことがない先輩方ともお話をしたり、ボランティアに参加したことで新しい出会いもありました。また、マラソンボランティア自体が初めてで緊張していましたが大人の方も付いてくれていてランパスのタイミングやマラソンの見ることのできない裏側も知れてとても楽しい時間を過ごせました。ありがとうございました。
- ・ 障害を持った方々がマラソンをしている姿を見て感動した。お父さんお母さんと一緒に、親子で頑張っている姿が伝わって、いろいろな思いの詰まった横浜マラソンであったと感じた。走っている方達に私たちが応援したエールが伝わってくれていれば嬉しいと思った。



だんだんの樹 演奏ボランティア

2021年度に学生スタッフにより発案された、NPO法人だんだんの樹と共催の音楽会が、今年度も春と秋にコミュニティだんだん（横浜市泉区）にて行われました。音楽芸術学科の学生スタッフを中心に、楽器の演奏（ピアノ、ギター、クラリネット、フルート、サクソフーン、トランペット、ハーブ）や歌を披露しました。9月の演奏会では、演奏・歌だけでなく、フラダンスやよさこいを披露しました。利用者と一緒に合唱するプログラムもあり、大変充実した演奏会となりました。

【春のコンサート】

開催日：5月21日（金）14時～15時

参加者：6名（音楽芸術学科3年3名・2年3名）

<プログラム>

～第1部～

1. 「北国の春」
2. 「ロンド・カプリチオーソ」
3. 「みかんの花咲く丘」

～第2部～

1. 「ヤシの実」
2. 「川の流れるように」
3. 「エーデルワイス」



【四季を訪ねてバスツアー】

開催日：9月8日（木）14時～15時

参加者：9名（音楽芸術学科3年4名・2年2名・1年2名、国際交流学科2年1名）

<プログラム>

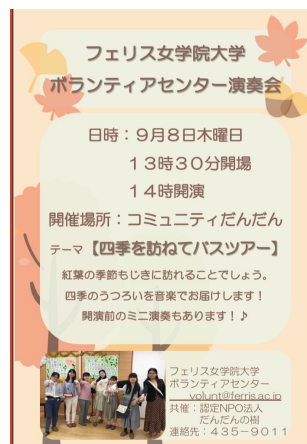
～第1部（夏の部）～

1. 「糸」
2. フラ（「カイマナ・ヒラ」）
3. よさこい

4. 「少年時代」

～第2部（秋の部）～

1. 「秋桜」
2. 「真っ赤な秋」
3. 「ふるさと」
4. 「この道」
5. 「紅葉」



めぐみ幼稚園クリスマス祝会 演奏ボランティア

開催日：12月10日（土）9時20分～11時

主催：横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園

参加者：7名（音楽芸術学科3年5名・1年2名）

めぐみ幼稚園から毎年クリスマス祝会の演奏ボランティアの依頼を受け、学生が参加しています。昨年はコロナで休止でしたが、今年度また招待されました。

プログラムは、第一部ページェント、第二部フェリス生による演奏、サンタさんからのプレゼントという構成。演奏の曲目は次の通りです。

1. 「雪」
2. 「ジングルベル」
3. 「あわてんぼうのサンタクロース」
4. 「恋人たちのクリスマス」
5. 「すてきなホリディ」
6. 「サンタが街にやってくる」
7. 「となりのトトロ」



【学生の感想】

- ・子どもたちや親御さんと楽しい時間と空間を作ることができて、嬉しかったです。
- ・この大学に入る前から演奏ボランティアは経験してみたいと思っていたので、このような機会があり参加させて頂きました。とても不安で緊張しましたが、温かい雰囲気の中めぐみ幼稚園の皆様が楽しそうにしている姿を見て、私達も自然と緊張がほどけて楽しく演奏でき、とても楽しい時間でした。また準備も含め、当日までの期間で学年を超えて先輩方と仲良くなれたことも嬉しかったです。



ジョイントコンサート

開催日：11月26日(土) 13時～15時

参加校：横浜市立岡津小学校、横浜市立岡津中学校、神奈川県立横浜緑園高等学校、フェリス学院大学

会場：横浜緑園高等学校 体育館

ジョイントコンサートは、2003年に岡津中学校と緑園高等学校が中心となり、地域連携事業として企画され、地域の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学の5校種ジョイントコンサートという形でスタートしました。横浜市より青少年健全育成事業の助成を受けて実施されています。

フェリスでは、2021年度から主管が生涯学習課からボランティアセンターに移り、音楽学部の協力を得て担当しています。

【出演者】

音楽芸術学科3年(フルート)、音楽芸術学科3年(フルート)、音楽芸術学科3年(ピアノ)

【演奏曲目】

1. 協奏曲的三重奏曲より 第一楽章 クーラウ作曲
2. ホールニューワールド アラン・メンケン作曲
3. 美女と野獣 アラン・メンケン作曲



1 day 学生ボランティア むかしあそびとだがしや

開催日：2023年2月4日（土）12時～14時半

場所：上菅田地域ケアプラザ（横浜市保土ヶ谷区）

活動内容：地域ケアプラザは、地域の高齢者、子ども、障がい者など誰もが安心して暮らせる福祉・保健の拠点です。地域の方々とのむかしあそびのイベントが地域で開催されるにあたって、会場セッティング、来場者対応、こどもの遊び相手などさまざまなボランティア活動を行いました。

共催：千丸台自治会、千丸台地区社会福祉協議会、千丸台地区民生委員児童委員協議会、上菅田地域ケアプラザ

協力：神奈川県、NPO 法人アクションポート横浜、保土ヶ谷区社会福祉協議会、横浜市岩崎地域ケアプラザ、横浜市川島地域ケアプラザ、ほどがや市民活動センターアワーズ

参加者：1名（音楽芸術学科3年）



使用済み切手・書き損じハガキ収集

ボランティアセンターでは使用済み切手、書き損じハガキなどを収集しています。送付先は、学校法人アジア学院や日本国際ボランティアセンターなどです。

切手の仕分けは学生スタッフが行っており、使用済み切手・書き損じハガキなどを送るこの活動は「身近にできる国際ボランティア」となっています。また、継続的な取り組みが社会への貢献につながります。宗教センター、山手事務室、教務課ほか学内の皆さまから収集の協力を頂いておりますことに、感謝申し上げます。

ペットボトルキャップ回収

回収したペットボトルキャップは、搬入先である「NPO 法人ともにあゆむ」を通じて、JCV（認定 NPO 法人 世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付しています。

集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO 削減量
2010 年度	45,600 個	57.00 人分	114.0kg	359.10kg
2011 年度	60,480 個	75.60 人分	151.2kg	476.28kg
2012 年度	80,539 個	97.30 人分	194.5kg	612.68kg
2013 年度	43,344 個	50.40 人分	100.8kg	317.52kg
2014 年度	58,093 個	67.50 人分	135.1kg	425.57kg
2015 年度	39,904 個	46.40 人分	92.8kg	292.32kg
2016 年度	41,495 個	48.25 人分	96.5kg	303.98kg
2017 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.64kg
2018 年度	37,152 個	43.20 人分	86.4kg	272.16kg
2019 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.65kg
2020 年度	24,854 個	28.90 人分	57.8kg	182.07kg
2021 年度	34,271 個	39.85 人分	79.7kg	251.06kg
2022 年度	30,788 個	35.80 人分	71.6kg	225.54kg
累計	570,136 個	657.80 人分	1,351.6g	4,257.57kg

* 2kg（860 個）でポリオワクチン 1 人分が購入できる。
（ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より
1kg=400 個より 430 個に変更された）



日頃からこうした活動にご理解下さり、感謝申し上げます。

ボランチ開催

4月25日(月)~28日(木)昼休みに、対面とオンラインでボランチを開催しました。既存の学生スタッフが新入生と一緒にランチをしながら、ボラセンでの活動やボランティアについてお話をしました。今年度は7名の新入生が参加しました。

第1回ボランティアセンター学生スタッフ研修会

日時：6月18日(土)13時~15時

場所：舞岡公園

主催：NPO 法人まいおか・やとひと未来

参加者：国際交流学科2年2名、日本語日本文学科2年1名、音楽芸術学科2年1名、
日本語日本文学科1年1名、音楽芸術学科1年1名、
佐藤センター長、堀尾コーディネーター (計8名)

NPO 法人「まいおか・やとひと未来」では、主に農作業のボランティアを受け入れています。本研修会では、初夏の農作業や古民家の見学を通じて、自分たちの栽培活動や食料支援について、改めて実践的に学びました。学生スタッフ同士が共に土に触れる事で、新1年生と既存の学生スタッフとの良い交流にもなりました。

【参加学生アンケートより】

- 1) 今回の研修会で一番印象に残ったことを教えてください。
 - ・自然を守ることの大変さ
 - ・私達はくっつき虫がくっついて大騒ぎしていましたが、研修先の方々は平然とされている所を見たことです。
- 2) 農業ボランティアについて、どう思われましたか？
 - ・自然を守ることの大変さを知ることができた。
 - ・今回の作業内容が農業とはギャップが有りましたが、自然環境を保全することの大切さを学べるボランティアでした。
- 3) 今回の研修会の感想を教えてください。
 - ・たまには自然に触れることも大切だと感じた。体力は使ったがリフレッシュできた。
 - ・外来種と在来種の区別が付かなくて間違えて抜きそうになりましたが、在来種は根っこが強く中々抜けないから一回抜いてみればいいということに驚きました。実際、間違えて引っ張っても抜けなかったので間違えて抜いてしまう事はありませんでした。取り敢えず、ひっつき虫が厄介でした。

新学生スタッフ・新学生コーディネーター委嘱式

7月20日(水)昼休みにCLA棟2階ウエルカムセンターにて、学生スタッフ及び学生コーディネーターに対する本年度の委嘱式を実施しました。センター長から学生スタッフ及び学生コーディネーター(学生スタッフ歴1年以上)に委嘱状が授与されました。



ボランティア論 ゲストスピーカー

7月20日(水)6限(18時10分~19時40分)「ボランティア論」で、担当教員の渡邊義昭先生にご協力いただき、堀尾コーディネーターと学生スタッフ3名がゲストスピーカーとして登壇しました。ボランティアセンターについての説明と、どのようなボランティアを行っているかについてお話をし、たくさんの学生にボラセンについて知っていただく事ができました。

<受講生の感想>

- ・学習支援や子ども食堂など学生スタッフの皆さんがそれぞれの興味や問題意識を持って活動されているのが素敵でした。紹介動画のクオリティもとても高く分かりやすく、学生でも高いレベルで活動できると知り、刺激を受けました。
- ・学生が主体となって運営しているところが魅力の1つだと思いました。ボランティアは自発性が最も重要であると考えられます。ボランティアセンターの活動はそれが軸となっているようで、素晴らしいと思いました。
- ・音楽面、教育面、食の観点など想像以上に活動内容が様々で驚きました。ボランティア活動はハードルが高いことのように感じていましたが、今回の説明を聞いていて、身近な小さいことからでも立派なボランティア活動なのだということを実感しました。
- ・学生スタッフとして活動していても、自身の参加するプロジェクトしか理解していなかった部分もあり、改めて確認できたことが良かったです。音楽演奏プロジェクトだけでなく、今後小学校でのボランティアも考えており、楽しみにしています。

横浜市民防災センター見学

日時：9月15日（木）15時半～16時半

参加者：音楽芸術学科3年2名、日本語日本文学科2年1名、
国際交流学科2年1名、コミュニケーション学科1年1名（計5名）

横浜市民防災センターは、防災・減災教育の場、災害時の応急活動拠点、横浜市消防音楽隊の活動拠点、機動特殊災害対応隊の活動拠点という四つの役割を持っています。

今回は身近な災害について日頃から意識するため、センターを見学、体験させていただき、女性の視点からの防災・減災について学びました。

知識の補完のみではなく、学生スタッフ同士の交流がより深まりました。



第2回ボランティアセンター学生スタッフ研修会

日時：9月24日（土）13時～15時 / オンライン開催（Zoom）

参加者：音楽芸術学科3年1名、国際交流学科2年1名
佐藤センター長、堀尾コーディネーター（計4名）

【内容】

- 1) 防災センター訪問学生による報告
- 2) 夏季休暇中の活動の報告、今後についての話し合い
- 3) 大学祭についての打ち合わせ

大学祭

活動内容の展示、動画紹介「テーマ：ボラセンプロジェクト紹介」

2022年11月5日から6日まで、3年ぶりに学内で大学祭が開催されました。2021年度はオンラインでの開催でしたが、2023年度は対面の開催となり、少なかつたものの外部の方の来場もありました。

ボランティアセンターでの活動について学生スタッフがパネルを作成し、展示しました。

また、学生スタッフが撮影・編集した紹介動画や、活動報告書、ニュースレターも見ていただき、学外の方々にボラセンについて知っていただく良い機会となりました。

展示

- ・ボランティアセンターの活動紹介（パネル）
アンネのバラ、学習支援ボランティア、演奏ボランティア、防災、農業プロジェクト等
- ・リーフレット
- ・ニュースレター
- ・ボランティアセンターの年間活動報告書

ビデオ上映

- ・ボランティアセンター活動紹介



学生のボランティア活動報告

今年度の音楽・演奏プロジェクトチームにおける活動を振り返って

音楽芸術学科 2年

私は今年度、音楽・演奏プロジェクトチームのリーダーとして、福祉施設にて演奏会を開催した。本活動に参加した経緯は、自身の得意分野である音楽を生かせる上、一から創作する演奏会のため、実践によって主体性など社会で役立つ能力を身につけられると感じたからだ。主な活動内容としては、特定非営利活動法人だんだんの樹で5月21日と9月8日に施設の高齢者の方々に向けて演奏会を開催した。1時間程のコンサートで、内容は季節を意識して曲選びを行い、形式に関しても5月はラジオ形式、9月はバスツアー形式にして高齢者の方々が楽しんでいただけるような工夫を凝らした。曲のジャンルは昭和歌謡曲や日本歌曲、クラシックなど高齢者の方々にとって馴染み深い曲を演奏することを意識した。また、9月には大学の授業で習ったフラダンスやよさこいといった舞踊の披露にも挑戦し、好評をいただいた。演奏会の準備にあたって、私は連絡係を担当し、話し合いを重ねた上でボランティア学生にも情報共有を行い、だんだんの樹との連携も比較的取ることができた。

私は当初、音楽を使ってできることの可能性を広げることと、社会に出て役立つ能力を養うことを自己の目標としていた。実際に演奏会を終えて、プロデュース能力とマネジメント能力は確実に向上し、音楽を通して人を楽しませることができていると手応えを感じた。

また、この体験において、演奏会をいかに計画的に準備し成功に導くか学ぶことができた。その過程で、企業メールの書き方や演奏会チラシの作成方法など技術面に加え、PDCAサイクルのような計画から終了後の振り返りまでの一連の流れを実践でき、社会人として身につけるべきスキルの習得に努めることができた。他にも、メンバー一人ひとりの特性を理解し、その人に適した役割を見つけ依頼することも、将来教員を目指す私にとって重要な学びだったように思う。リーダーを務めることは想像以上に責任が重く、未経験のため不安もあったが、綿密に計画を立て皆に気を配り、課題を改善させていくことで、リーダーの資質・能力が身についた。

今後はまず、後輩にこの体験で得られた学びを伝えたい。それに加え、ゼミで演奏会を企画する際に学びを活かしたり、とりわけマネジメント能力に関しては教育関係のボランティアでも活用したい。

一方で、もちろん改善点もある。例えば、先方との連携の取り方である。私は主にメールで連絡をとっていたが、それだけでは共通理解に欠ける部分もある。そのため、先方とは演奏会を開催するごとにオンラインミーティングを少なくとも一度は実施することが重要だと感じた。他方、学生間の連携の取り方にも課題がある。ラインのグループでは活動に参加していない人も含まれているため、その人たちに活動したい意思があるか確認することや演奏会に応じて参加者グループを作ることを検討しても良いだろう。そして、学生間の連絡ツールとしてはラインとクラスルーム、スラックが挙げられるが、現在はそれぞれの機能性が曖昧なため、そ

それぞれのツールの使用目的も明確化すると改善につながると思う。

ボランティア活動は主に新しい自分を知る、社会貢献をするという側面で意義があり、就職活動や社会人になった際の未来も見据えて役立つ能力を培うことも可能なため、今後も多くの学生にボランティア活動を推奨したい。

演奏ボランティア（だんだんの樹）

音楽芸術学科 2 年

1. なぜボランティア活動を行ったか

まず、同学年の学生スタッフから本大学のボランティアセンターで演奏活動を一緒に行わないかと声をかけてもらって音楽・演奏プロジェクトに所属したことがきっかけです。また、高校時代に音楽部に所属しており、地域の方に楽器演奏や合唱を披露する機会があり仲間と共に演奏する楽しさと難しさを知りました。本大学ではソロで演奏する授業やレッスンしか履修していなかったため、このプロジェクトを通してもう一度人前で仲間と共に演奏し、成功した時の達成感を味わいたいと思ったからです。

2. 当初の自分の目的を達成したか

最初の自分の目的として「コーディネーターや学生スタッフとコミュニケーションをとる」ことでした。プロジェクトを開始する前（春期休業時）に音楽芸術学科・土屋広次郎先生との音楽レッスン研修会や横浜市立大学のボランティア支援室の皆さんとの交流会がありました。その時期はコロナ禍で研修会や交流会はオンラインでの実施だったため皆さんとコミュニケーションすることが非常に難しかったです。ですが、ボランティアセンターの雰囲気を一いち早く味わい慣れたいと思い少しずつですが、些細な会話でも話すよう心がけました。そして研修会や交流会を通して学生スタッフやコーディネーターとコミュニケーションをすることでボランティアセンターの方向性が見えてきました。時間はかかりましたが、以前よりも内気な自分を克服することができてきたと思います。研修会や交流会のおかげもあり、音楽・演奏プロジェクトでは自分を受け入れてくれる仲間ができました。また自分の交友関係が深まったことと他者からより明るくなったという言葉をかけてもらったことが率直に嬉しかったです。

3. 活動において発見したことは何か

私は2回にわたり（2022年5月21日・2022年9月8日）特定非営利活動法人だんだんの樹 コンサートという名目で音楽・演奏プロジェクトとしてボランティアをさせて頂きました。

この活動において発見できたことは「1つひとつの経験が今後の役に立つ、無駄なことはない」ということです。私はだんだんの樹さんの玄関先に設置するチラシとプログラム作りを担当しました。正直なところパソコンを用いて何かを制作するということが苦手意識を持っていたことは事実です。まずは高齢者の方が見やすいようにデザインをシンプルにして、文字を大きくするようにしました。それでも全体のデザインが上手にまとまらず、思い悩んだこともありました。そのような時にコーディネーターを始め、同学年の学生スタッフに何度もアドバイスを頂き作成することができました。先日スライドを用いたプレゼテーションを行う授業がありました。発表後クラスの方からスライドが見やすかったとのコメントがあり嬉しかったです。チラシとプログラムを作った経験が授業で活かせることができ、どんな

に苦手なことでもチャレンジしつづけること、きっとそれはどこかで活かされるのだと発見することができました。

4. この体験を通して何を得たか

この体験を通して「責任感」を得ることができました。同学年の学生スタッフから声をかけてもらった時から初めてのボランティア活動に心躍ると同時に相当な覚悟を持っていなければという思いはとて大きかったです。音楽・演奏プロジェクトでは全学生スタッフと団結しなければ成功にはならない、自分だけではないということを毎回の活動で意識していました。まずは与えられた作業は丁寧かつ早く仕上げることを目標に責任を持って仕事を行いました。特に2022年5月21日に行われたコンサートでは準備が約2週間と短い期間でしたが、空いた時間や休日を上手く活用してアンサンブルの練習はもちろん、皆が現地で使用する飾り付けも制作しました。

5. 自己について発見できたか

活動において発見したことは「自分自身の行動力」です。元々高校生時代までは自分の意見を発言する回数が少なく、意見を言うことに戸惑いがありました。また加入したばかりは今までのコンサートがどのように行われてきたのかが具体的にイメージしづらかったので自分の中でもまとまらないことが多く意見を言い損なうことがしばしばありました。とあるオンラインミーティング時に、こうした方がより良いのではという案を出したところ、自分の意見を採用された時はプロジェクトに貢献できていると実感が湧き嬉しく思いました。その時から自分の案が採用されても採用されなくても意見を言うことに価値があると思うようになり発信し続けました。また、2022年9月8日のコンサートのミーティング時では皆が意見を言いやすい雰囲気作りにも心がけました。関わりの少なかった下級生も含め何か困っていることはないか、どのような方向でコンサートを実施したいかなど自分から進んで声をかけました。積極的に関わることによって自分の可能性や周りに良い雰囲気を作ることが可能だということを知りました。

6. この体験をふまえ今後何を行いたい

今後はこの経験を自分の演奏活動に活かしていきたいです。だんだんの樹で演奏をしたことによってまた1歩成長することができました。そしてプロジェクトを通して音楽で人と人が繋がることのできる体験をこの目で確かめることもできました。私は幼少期の頃から現在までピアノを学んでいます。時々弾くことだけに集中してしまい、人に届けるという意識が薄れてしまうことがあります。ですが聴かせる音楽を作らなければ意味が無いと考えています。そのためには完璧に弾けるように練習すると同時にその曲に対する自分自身の思いを音楽にのせて聴いている方に良かったと思えるような演奏をしていきたいです。練習時や演奏会の発表前に音楽・演奏プロジェクトで感じたことを思い出し演奏できればと思います。

7. 参加したボランティア活動（又は団体）に関する提言

プロジェクト終了後に高齢者の方々、そしてだんだんの樹のスタッフの方々にお褒めの言葉を頂いたことが何よりも嬉しかったです。ソロの演奏では味わえない、皆と一緒に活動することの良さを味わうことができました。だんだんの樹のスタッフの方々、事前の日程調整、本番前のオンラインミーティング、演奏終了後に反省会の場を設けて頂きありがとうございます。そしてこのような素晴らしいコンサートの機会を設けて頂き感謝いたします。

8. 自己評価

先述の通りお客様からのお褒めのお言葉が自分の演奏の活力になりました。またこのような経験は生涯の大きな宝物となりました。反省点としてお客様の目線になって「演奏」と「交流」ができたかという点があります。「演奏」という部分に関しましてはどの世代にも馴染みのある曲を考えてきたつもりでした。ですが実際に高齢者の方が曲を聴いて反応が良い時と反応が静かな時の差が激しいと感じました。もっと高齢者が聴いて分かる、楽しめる曲を提供すればなお良かったです。まずは自分が勉強しているクラシック音楽やポップス曲だけでなく、ジャンル問わずたくさんの曲を聴くこと、また自分の祖母や母に昔流行していた曲を教えてもらい演奏に臨めば良かったと考えます。「交流」という部分に関しましては高齢者の方との音楽で心が通じ合うことができました。ですが、コロナ禍ということもあり、交流の時間が少なかったと感じました。コロナ禍が収まり以前のような日常を取り戻すことができる世の中になったら学生スタッフがレクチャーして高齢者の方と一緒に簡単な楽器を用いて交流する、演奏後にお話しする時間を設けるなどすれば最良だと考えます。

学習支援活動に参加して（横浜市立本宿小学校）

音楽芸術学科 3 年

私は週に 1 回、横浜市立本宿小学校にて学習支援のボランティア活動をしています。時間は午前中で、学校の時間割で言うと 2 時間目から 4 時間目までです。校長先生をはじめとした教員の皆さんが積極的に「ありがとうございます」「よろしくお願いします」など声をかけてくださるので、児童たちの明るさや活気の良さはもちろん、ボランティア活動をする身としてもとても心の助けになっています。

この小学校では普通級の他に、特別支援級として聴覚過敏の子どもたち対象の教室と授業についていくことを困難とする子どもたちの教室があります。このような教室では、宿題やワークシートを一緒に解いています。最近では普通級の 1～6 年生の指定されたクラスに配属されることが多く、毎週同じ曜日・時間に入るので、クラスも固定されてきています。普通級では教室の後ろからの指導で、わからなかった部分を個別に指導し、教科書やノートが開いていない子に授業に参加するよう促しています。

担任の先生との交流はクラスによってそれぞれです。1 校時につき 1 クラスをみているので、特に話すこともなく授業が終わってしまう先生もいれば、「今日はこんなことをするのでこんな支援をお願いします」「この子を中心にみてください」と具体的に指示してくださる先生もいらっしゃいます。また、九九の暗記テストの確認など、先生として指示をくださる先生もいらっしゃり、クラスによって役割がかなり違うように感じます。

自身は将来音楽の教員を目指しており、6 年生の合奏の授業もお手伝いしました。授業では打楽器のパートのサポートに入り、リズムや記号のわからない生徒に指導したり、質問を受けたりしました。私は音楽学部なので、音楽面でも学習支援ができたという思いがあったので、とてもいい経験になりました。音楽室では伴奏や楽器の練習をしている生徒が多く、音楽にも力を入れている様子が伺えました。

週に 1 度という短い時間ですが、子供たちと関わる中でたくさん元気もらっています。特に 1、2 年生の児童から手紙や折り紙をプレゼントしてもらったことが印象的で、1 年生の子からもらった折り紙はずっと名札に入れて活動しています。

学習支援ボランティア（このは塾）

国際交流学科 2 年

1. なぜボランティア活動を行ったか

私自身、不登校になってしまっていた中学生時代があり、理由は何であれ困っている、苦しんでいる学生の居場所、気持ちの安らぐ環境を与えたかった。そして何よりも、そんな学生たちの役に立ちたかったから、笑顔が見たかったからである。自分自身の過去のこともあり、気持ちは人一倍理解してあげられると思い、勇気を出して活動を行った。

2. 当初の自分の目標を達成したか

私は主に歳が近いということで、通信制に通う高校 3 年生の英語の学習支援をさせてもらった。最初は、その子の性格上、はしゃぐタイプではなかったため、学校でもらっていたテキストをわからないところだけ聞いてきて、わかるところはひとりで、黙々と進めていた。

だが、回数を重ねていくごとに、進学する大学の話、自身が飼っているペットのうさぎの話までもしてくれるようになっていた。遅刻しがちの生徒で、最初は強張った顔で私の座っている机に来ていたのだが、徐々に「遅れたー、すみません」と笑顔で駆け寄ってくれるようになった。この子にとってここは苦痛な場所じゃなくなった、楽しくなってくれたのかなと思い、その時の嬉しさは今でも鮮明に覚えている。

そして、担当していない中学生の女子が、歳が少し上の私に興味があったのか、笑顔で自己紹介をいきなりしてくれた。先生たちは、みなさん大人の方なので、歳が近い私に興味を持ってくれたのだろう。それもすごく嬉しかった。拒絶されていないのだと思えた。そこからその子とは塾で会う度に、少し会話をしており、いい関係が築けたと思う。

生徒たちが、笑顔で話してくれるようになり、自身の話までしてくれるようになった。私の目標は達成できた。

3. 活動において発見したことは何か

色々な事情を持った子がいるということ、そして自分の生ぬるさだ。主に経済的に苦しんでいる学生、あとは精神疾患を患っている学生、不登校の学生が塾には来ていた。そして帰国子女で、日本語があまり話せないのだが、18 歳で日本の高校受験をするという生徒もいた。

母子家庭で、家事などを担っており、学習時間が取れない学生、過去のトラウマで精神的な病により、朝起きられなく病院通いで学校に行けない学生、先生や友人とのトラブルにより不登校になってしまった学生、様々だ。

私は自分の知っている世界は狭かったのだと感じた。私含め、不登校の学生は自分と同じ学年、学校に何人もいたが、中学受験で入る中学であったためか、経済的に困難な学生は見たことがなかった。大抵、友人とのトラブルや勉強についていけないストレスでの不登校であった。だが、この塾にいたのは、大半が経済的要因で学習する場所が与えられない子どもであった。自分の今まで見てきた世界は、親が勉強しろというから勉強を頑張っている。そんな世界であ

った。だが、ここの塾の生徒たちは、親が家庭を支えるため遅くまで帰って来ないため、家事を担っている。だから勉強をする時間がない。こんな学生であるのだ。

でも、ここの生徒たちには明確な目標があり、行きたい高校、将来の夢までしっかり決まっていた。こんな若さで頑張りすぎなのではと思うくらいがむしゃらに頑張っていた。

精神疾患を患っている学生は、吸収がよく、できないことがあると悔しくなって機嫌が悪くなってしまおうような、そんな学生であった。学校に行って授業を受けたら、すぐ飲み込めるような学生だ。だから、自分が朝早くに起きて、学校に行けないことを自分で責めてしまっているように見えた。周りと同じ生活を望んでいるのに、それができないということはこの性格のこの子にとって、どんなに辛いことだろうかと何度も考えた。

私はそんな学生達を見て、自分の今までの人生の生ぬるさに嫌気がさした。自分より歳下の学生がこんなに頑張っているのに、なぜこんなに甘えに甘えまくった生活をしているのだろうと。自分ももっと成長しなければならない、今ある環境に甘えてはならないと、生徒が教えてくれた。だから、大切なことを教えてくれた、見せてくれた生徒達、この場所に出会わせてくれて学ばせてくれた両親、大学への感謝を胸に、より成長していきたいと思う。

4. この体験を通して何を得たか

人の環境や心を考えて発言するということである。私は、この塾の生徒達にガツガツプライベートの話をしたり、聞いたりしなかった。それがストレスになって来たくなくなる学生もいると塾を指揮して下さっている先生に最初の説明で教えてもらっていたからである。だから、この塾に通っている生徒は、家庭の事情や家族構成など、聞かれたくない、正直他人の幸せそうな家庭事情も聞きたくないのではないかと思った。

私の周りの友人達は「今日からママとパパと旅行に行く」とか「家族でお寿司に行く日なの」「友達とショッピングに行く」などと楽しそうに話してくれるし、私も同じように何気なく話していた。

だけどそれは、私の周りの話であり、この体験を通して視野が広がった私は、みんながみんなこうではないと知ったのである。家族や友人で悩んでいる人もいる。私も友人関係で悩んでいたことがあった。

だからこれからは、人の環境や心を考えて発言することを意識して人と関わろうと思う。これを実行したおかげで、私は生徒達と友好的な仲になれたし、自分から家族の話までしてくれるようになった子もいた。生まれてきた環境が違うからといって、分かり合えないわけではない。お互いを尊重することによってお互いが刺激し合い、成長できるという考えも得た。

5. 自己について発見できたか

発見ばかりであった。まず、3にも記したように、私自身の生ぬるさ、そして自分は、LGBTQや貧困家庭などを授業で習っていたため、多様性が身に付いていると思っていたが、そうでもなかったことだ。この世には様々な境遇で生きている人がいる。1番そう感じたのは、18歳の帰国子女の高校受験である。両親が離婚し、父が日本人であった彼女は、父と共に日本に戻り、日本で今後生活を送るために高校受験をすることになったのだという。彼女は、本来であれば

今年大学入学の歳であり、今では高校3年生である。そんな彼女が、15歳、16歳の年代の日本の学生と共に高校に入学しようとしているのだ。帰国子女入試を活用しての受験のようだが、帰国したばかりで日本語もほぼわからない、年も違う子達との生活は、彼女にとっても想像がつかないものであると思う。私はその子話を聞いた時「そんなことが可能であるのか」と驚いた。私は一度、その彼女と英語の受験勉強をしたことがある。会話はあまり成り立たないものの、勉強熱心で集中力が長けていた。好きな問題や興味がある問題には食いつき、理解していないのにも関わらず、ずっと解き続ける。そんな彼女に、少し腹が立っていた自分がいた。なんで少しずつ進めて理解していこうと思わないのだろうと。だが、それはきっと育ってきた国の特色だろうと塾の先生達がおっしゃっていた。そこで私は、自分は異文化についての受け入れが遅れているのだと感じた。多様性を理解できていない。この子はこうなのだ、個性だと受け入れられていなかった自分にハッとしたのだ。

これらから私はこの塾で、自分の人生の生ぬるさと、自分が理解していると思い込んでいた多様性の理解のなさを発見し、今後活かす勉強ができた。

6. この体験をふまえて今後何を行いたい

大学生のうち、この塾でまたお世話になり、もっと事情を抱えた子ども達の理解ができるよう、勉強をしていきたい。

大学を卒業し、自分が働き、余裕ができたなら、私もこの塾のような、苦しんでいる子ども達に寄り添える場所を作りたいと考えている。この塾は本当にすごい。2限までマンツーマンで授業をするのだが、1限と2限の間におやつタイムを取り、先生と生徒との親睦を深められる時間がある。そして毎回生徒が帰った後は、先生達で話し合いをし、次の会に向けての準備、話し合い、今日の反省会をする。先生達はみんなボランティアで、問題を抱えた子ども達の役に立ちたいと思って参加している方ばかりだということが話しているだけで伝わる。こういった考えを持っている人達は少なくないと思う。だから私は、こういった方々を集い、問題を抱えた子ども達が心安らく、笑顔になれる場所を将来作りたいと考えている。

そのために、大学生のうちはこの活動に活かせる科目を履修し、塾での支援ボランティアも続け、学び続けようと思う。

7. 参加したボランティア活動に関する提言

この塾に通える条件としては、大まかに経済的困難、不登校などだが、違った理由で困っている子どもも多いのではないと思う。だから、先生達は人数的な問題もあり、大変だとも思うが、これら以外の色々な事情を背負った子ども達に通えるような場所になればもっといい場所になるのではないと思う。

8. 自己評価

私はこの塾での活動を通して、たくさんのことを学ばせてもらった。自身のこと、様々な事情を持った子どもがいること。これらの学びを生かし、今後どう生きていきたいかまでも学べ

た。だから、私はこの活動ができて本当によかった。

そして、これからもこの活動で様々なことを学び、人の役に立てる大人に成長していくことを誓う。

学習支援ボランティア（東名中学校）

日本語日本文学科 3年

1. 活動開始の経緯

私は現在、中高の国語科教員免許取得の身であり、中学の教員を志している。4年時の教育実習や実際に教員として学校に赴任した際の後学のために現場での実践を重ねる機会として、2021年度後期ごろには厚木市教育委員会認定の「学習支援ボランティア」として、2022年度前期には神奈川教育委員会からSLS（スクールライフサポーター）に任命され、活動していた。さらに学校に貢献したい、学校教育の現状を知り、自身の教員適性を高めたいという思いの下、2022年度後期からは「ボランティア活動2」として、生徒の登校時間から一般下校時間までの一日を活動時間とし、週一回の活動を行うこととした。

2. 活動を終えて

国ないし都道府県、市町村では「地域とともにある学校」を目指し、教員の業務の負担を減らす事も一つの目的として、事務職などの職員の導入やボランティアの参入に力を入れている。社会からの関心も高まっており、ニュースに取り上げられることも多く、それらの報道の中で参入人数が増加していることも分かっている。しかしながら、実際に現場で活動をする中では、ボランティアが学校の中でできることは限られているのだと痛感した。教職は一般的な理解以上に資料の作成等の事務的な業務が多い。子どもの個人情報に関わるものも多いため、そのような業務を私達ボランティアという立場が手伝うことは難しい。

実際に学校現場に入ってみて、教員以外の大人から教科学習以外の人生経験等の教授・提供の機会の重要性・それらが子ども達に及ぼす影響力の大きさを身に染みて感じた。一学生としても、年齢や立場の異なる生徒との関わりを通して、新たにやりたい事や今の自身の課題を見つけたり、学生時に抱いていた悩みや思い等を思い出したりすることができたため、刺激になり、向上心等を高めることや成長することができたように思う。これは、教員を目指す者としてだけでなく、人に寄り添うという意味でも、自身がよりステップアップする機会になったように考える。今後はこの機会を生かして、一市民として、地域の児童生徒を見守る立場の自覚・責任を持った上で地域活性化や安全安心の街づくりに繋げていきたい。

上記したように、自身も受け入れ先も立場や活動の在り方を模索しながら開始したボランティアであったが、雑務等を行うことを通して、教員の負担を減らし、学校環境を整えることに貢献できたように感じる。また、授業・学校生活全体の見学という側面をも持った活動であったため、教員の働く姿を実際に間近で見える機会、また、教育実習とは異なる視点から学校の実態を知る機会とすることができた。そのため、今の私が伸ばすべき能力等の今後の課題や、実習や実際に教員になる前に準備しておくことを明確にすることができた。

昼休みや授業の間にある10分休み、レクリエーション等の授業を通して、部活動に関する話や勉強に関する話の他、たわいのない会話をしたり、手遊びゲームをしたりして生徒と共に笑い合っただけで過ごした。このような時間や共に過ごす生徒は日を経るごとに多くなり、そ

の中で信頼関係を築くことができたように感じる。このような時間を生徒と過ごすことができたためか、活動後半になるにつれて、授業中の机間指導の際やすき間時間において、学習の質問をしようと私に声を掛ける生徒が増えた。このことから、日々、生徒と信頼関係を築いていくことや自身が話しかけやすい雰囲気であると認識してもらうことは、子どもの学習活動の向上にも繋がるということを感じた。

机間指導を行う中で、また生徒から声を掛けられる機会が次第に増えていく中で、生徒がどの点に困難を抱えることが多いのかを知ることができた。そして、つまづいている者の中には自身で挙手できない者がいることはもちろん、生徒自身がどの点がわからないのか・つまづいているのかを把握できていない場合、解き方等は分かり自身で答え・考えを出せているものの自信を持ってプリントに書き込む等の行動に移せていない場合も多いことがわかった。生徒が質問しやすいように机間指導を展開することはもちろん、教師自らが「解き方合っているよ」や「良い着眼点だね」と生徒を肯定するような声を掛けることも重要であると感じた。同時に、教室を巡回する中で、生徒それぞれの学習状況の確認を瞬間的に行い、個別最適な指導・支援を行う力が教員に必要であると学んだ。それらを意識して活動を行う中で、広く周りを見渡す力、生徒が今困っていることを把握し、寄り添いながらその生徒に最も適した指導・支援を考えて実施する力を少しでも培うことができたと感じている。また、生徒それぞれの長所や成長に気付くことができる力が私自身の長所であったが、生徒との関わりの中でその力をより磨くことができた。

さらに、半期の間、教室の後方から授業を受ける中で生徒と共に授業を受けながら、生徒の様子を観察する中で、生徒がわからないことをそのままにしたいとする向上心・探究心を強く持っていることや、問題の解き方や自身の考えを友人と共有すること・教え合うことを楽しんでいることを実感した。生徒は、勉強の本来の意義を理解した上で課題に取り組んだり、テストのために対策したりと日々生徒が学んでいる姿を目にする中で、話をして実感する中で、その力を引き出せる教育者になりたいと強く感じた。学校では二学期から各教室に電子黒板が導入されたため、授業における ICT の利活用がより活発になっていた。一学期間より一段と ICT を活用して行う授業方法を見ることができたため、学校の実状を把握し、それらを大学での教職科目の模擬授業において生かして実践することができた。教育実習以前に学校教育や実習校の実状を知ることができたため、今年5月から始まる実習では、自身のしたい事を試し実践する機会や教員としてどのように生徒や授業づくり・業務と向き合えばよいのかを現場の先生方との関わりや見る中で学ぶ機会として活動していきたいと考える。

生徒と話す中で、中学・高校時代、今大学生で何をしたか等を問われる場面が多かった。教員は自分の人生を一つの教材にしながら生徒に教える職業であるため、今、大学生のうちに様々なことを経験しておく必要があると強く感じた。自身の人生をより有意義に、実りのあるものにしていくことを今後の課題の一つとしたい。また、教員は常に学び続ける事が肝要とされるが、それは単に知識を吸収するという事だけにはとどまらない。教師生活の一方で自身の時間を充実させ、映画やドラマ、本等からも様々なことを感受することが重要であると考える。実際に生徒との会話の中で観ているアニメや読んだ本などについて共有したこ

とが自身にとっても生徒にとっても楽しい時間であった。私は生徒との間に共通項を持っていたいと思う。そのため、これからも常にアンテナを張り、人や娯楽から刺激を受け、自身に還元していきたい。そのための一つの取り組みとしても中学生に人気である本などを読む機会を今後増やしていきたいと考える。このような様々な自分磨きを通して、生徒と共に歩み、成長していく、より素敵な中学校教師になれるように全力で励む決意である。

横浜 NGO ネットワークでのボランティア

日本語日本文学科 3 年

1. なぜボランティア活動を行ったか

私が大学に入学した年から、小学校から高校までの授業の中で SDGs について授業内で学んでいくための取り組みを本格的に始めていくことが決定された。そのため、私は、学校で SDGs を深く学ぶことはないまま、卒業する形となった。最初は、学校の授業の他に学ばなければならないことが、自分の代で増えずに済んで良かったと思っていた。しかし、私の妹が SDGs について学校で学んでいる様子を見て、今、社会で積極的に取り組もうとしていることについて知らないままで良いのだろうかと考えた。さらに、そこから、知らないことを知らないままで過ごすということは、一時は楽でも自分の学びのチャンスを自分で潰してしまうことになり、自分のためにならないのではないかと感じた。そのため、知らないことを知らないままで過ごすのはもったいないことなのではないかと感じ、SDGs について知り、自分ができることについて知りたいと思うようになった。そして、自分が知るだけでなく、多くの人にも伝えていきたいと思った。こうした思いを実現したいと思い、貴校のボランティアセンターにお伺いしたところ、横浜 NGO ネットワークのボランティアを紹介していただき、自分のやりたいことと横浜 NGO ネットワークで行われている活動内容が合致していたため、このボランティア活動への参加を決めた。

2. 当初の自分の目的を達成したか

当初の自分の目的である SDGs について学ぶことと、SDGs において掲げられている 17 の目標達成のために自分ができることについて知ることができた。

まず、横浜 NGO ネットワークの活動に参加し始めたばかりの頃は、イベントの参加や他の学生が主催した SDGs 勉強会を通して、SDGs で掲げられている 17 の目標にはどのようなものがあり、それぞれの課題と考えられる解決策について学ぶことができた。

次に、こうした他学生の取り組みやイベントでの他団体の発表内容から SDGs について学ぶ中で、今度は自分に結び付けてできることはないかと考えた。そこで、私が文学部に所属していることを生かして、文学から SDGs について考えるという企画を立案した。そのため、フェリスの国際課を通して、実際に留学生とコンタクトを取り、皆で「子どもの頃に好きだった本」という共通の話題のもと、本の紹介を行った。そこから、全員が出した本が世界各国の言語で翻訳されているという共通点を見つけ、世界の少数言語が直面する課題と解決策についての発表を行った。結果、自分の得意なことを生かしながら、SDGs の目標達成に向けて何ができるかについての発表をすることができた。

以上の点から、ボランティア活動を通じて、当初の自分の目的を達成することができた。

3. 活動において発見したことは何か

ボランティア活動中に会った人達の SDGs についての取り組みを見る中で、SDGs は様々な年代の人々が様々な角度から取り組むことのできるものであるということを発見した。

そもそも、大手飲食店がプラスチック製のストローから環境に優しい紙製のストローの提供に変更したり、大手食品メーカーが自社で販売している商品を通してフェアトレードについての活動を行っていることは、以前からよく目にしていたため、こういった活動が SDGs において達成したい 17 の項目に当てはまる活動だということは知っていた。しかし、ボランティア活動をする中で、他の学生は SDGs についての歌を制作して YouTube で配信したり、海外にルーツがあり、なおかつ 3 か国語で落語を行っている落語家に国際理解についての話を聞きに行き、動画にするといった企画を行っていた。こうした点から、アプローチの方法も人によって様々であり、それぞれが、自分が興味を持ったことや得意なことを活かして SDGs について考え、発信することができるものだということを発見できた。また、こうした発見は、SDGs について知り、企画を考えるうえで、良い刺激にもなったと考えている。

4. この体験を通して何を学んだか

自分で立てた企画の運営やチラシ作りを通して、自分の考案したことや実行したことが形になったことで、自分に自信を持つことができた。絵を描くことは得意ではあったが、不特定多数の人々に向けて情報発信を行うためのツールとして絵を描くことは今までにない経験だった。また、自分で立てた企画を周囲の人々を巻き込みながら実行していくことも初めてだったため、始めたばかりの頃は、不安に感じた部分が多かった。しかし、実際にやっていくなかで他の人が自分の案を受け入れ、協力してくださったことでどちらも無事に成功し、自分の功績として形の残るものとなった。この経験は、始めたばかりの頃の不安を払拭することにつながったと感じている。ここから、自分の考案したことや実行したことが実際に形となり、結果として表れたことで、自分の行動だけでなく自分自身にも自信を持つことができた。

5. 自己について発見できたか

自分の強みを生かすことでできる自分なりのリーダーシップの取り方があるということを発見できた。元々、リーダーになった経験がなかったため、自分が中心となって何かに取り組むことをしてこなかった。そのため、横浜 NGO ネットワークのインターン生として、自分で企画を立てて協力者を募り、企画運営の代表者として発表まで行うということ自体が初めての経験だった。さらに、私は、普段からチーム内では裏方としてチームを支えることに楽しさを感じていたため、自分がリーダーとなって人をまとめるということには苦手意識があった。しかし、企画運営のために人をまとめていく中で、裏方でチームを支えていた経験を生かす形で、紹介動画を撮影する際の事前練習や、感想などの自分達が話す大まかな内容を予め共有しておくというように、事前に予防線を張ることが、本番で全員が焦ることなく本紹介や意見交換を行うことにつながった。ここから、自分には計画を実行するうえで不安な点を洗い出し、予防線を張るというやり方で人をまとめていくリーダーが務まるということを学んだ。

6. この体験をふまえて今後何を行いたい

SDGs についてもっと多くの人々に関心を持ってもらうための対面イベントを行いたいと思った。私がイベントで行った企画はオンラインで配信するものだったが、オンラインでは、参加するためには事前に個別の会議室に入室しなければならないため、集客に難しさがあっ

た。しかし、参加団体主催のイベントで神奈川大学のインターン生が学園祭企画と関連して対面形式で行われていたフェアトレード商品の販売会場には、年代や性別問わず多くの方々が来場していた。ここから、こうした対面での販売コーナーなどは、気軽に立ち寄りやすく、商品を見ながら SDGs についても学ぶことができるという点で、来場者にとっては参加しやすいという利点があるのではないかと感じた。そこで、次回イベントを行う際には、神奈川大学だけでなく、フェリス女学院大学や他のインターン生の大学の学園祭等でも、コラボ企画として商品販売を行っていくことで、より多くの人に楽しみながら SDGs について知ってもらえるようにしていきたいと考えている。

7. 参加したボランティア活動（又は団体）に関する提言

伝統舞踊を主催者と参加者が一緒になって体験することができるといった、視聴者参加型の企画を、今後増やしていく必要があると考えられる。

そもそも、横浜 NGO ネットワークだけでなく、他の団体も、SDGs の普及活動ということになると、セミナーなどを開催することが多い。しかし、「セミナー」型の企画は SDGs について学ぶという学習的な要素が強くなってしまいがちなので、参加者にとっては敷居が高いと感じてしまうという問題点があると考えられる。実際に、SDGs の普及などを行うために年に3回行われている「SDGs よこはま CITY」のイベントでは、海外の先住民の間で代々受け継がれている伝統舞踊を発信しながら、主催者と参加者が全員で伝統舞踊を体験するという企画が、学生を中心に人気があった。ここから、こうした企画は学習的な要素が比較的少なく、楽しみながら SDGs を知ることができるという点で有効な方法なのではないかと考えられる。

以上の点から、今後イベントを行っていくうえで、対面形式とオンライン形式のどちらで進めていくにしても、視聴者参加型の企画は、今後増やしていく必要があるのではないかとと思われる。

8. 自己評価

ボランティア活動を通して、自分の得意なことや考えを生かして人々に影響を与えることができた点が、自分の中で一番評価できる部分だと感じている。例えば、イベント情報を発信するためのチラシ作りでは絵を描くことと文章を書くことが特技であることを生かし、使用するイラストの作成や、伝えるべき情報の推敲や配置など、多くの事柄を自分で考え、独自のチラシを作成することができた。そして、完成したチラシを神奈川県内の全高等学校に送付したり、公式ホームページに掲載したことで、より多くの人に、自分の考案したもので少しでも影響を与えることができたのではないかと感じている。また、イベントの企画運営では自分で考えた企画を達成させるために、横浜 NGO ネットワーク関係者をはじめ、ボランティアセンターの方々、留学生、国際課等多くの方々と巻き込む形で運営を行った。ここから、自分で考えた企画を成功させたいという思いが多くの人を巻き込むという形で影響を与えることにつながっただけではなく、こうした行動によって SDGs について知ってもらおうきっかけを作るという影響を与えることができたのではないかと感じている。

以上の点から、ボランティア活動を通して、自分の能力や行動によって、多くの人々に影響を与えることができた点が、一番評価できる部分だと感じている。

被災地支援ボランティア活動報告

第三回おおくまハチドリプロジェクト

～東日本大震災から10年・大熊町の未来を創造するアイデアソンプログラム～

国際交流学科4年

【期間】7月14日～8月29日

事前勉強会(7/14)、現地見学会(8/6-7)、住民対話セッション(8/10)、プレゼン準備(8/8-28)、中間発表会(8/29)

【主催団体】株式会社 Oriai

【内容】「たとえ小さなことであっても、なにかできることを見つけて実行する」というコンセプトのもと、全国の学生が大熊町の復興のために企画立案をする。

【目的】3.11の福島第一原子力発電所の事故により全町避難を余儀なくされ、一時人口ゼロの状態になった福島県大熊町の地域再生、関係人口創出。

【感想】

私は東北に縁のない人間でした。旅行でも行ったことがないし、東北出身の友だちもいません。漠然と「10年経ってるし、復興も終盤だろう」と楽観的に思っていた節がありました。そして迎えた現地見学会。空っぽの建物、空っぽの道、空っぽの車。あの日から時間が止まったままの町が今も存在することを、3.11から10年以上経った大学4年の夏、初めて実感しました。海の音がとても大きく、怖かったです。水が黒く濁っていて、ここに人が飲み込まれたと思うととても苦しかったです。小学校の教室を覗き、そこにあたたかな日常が流れていた痕跡を見て、胸が張り裂けそうになりました。この忘れたくない、忘れてはいけない記憶と、ここに誰かの日常があったことを、私たちは永遠に伝えていかなければいけない。その一心で政策提言をしました。空っぽの町に再び人々を集めるにはどうすれば良いかを考えるのは、中々骨が折れましたが、結果、満足いくものができたと思います。この記憶を忘れず、私も、人々も、そして大熊町も、未来に向かって進んでいけたらいいなと思います。

ボランティアセンター資料

ボランティアセンター規程

2003年1月23日制定

2007年1月25日改正

2015年3月12日改正

2007年5月17日改正

2016年3月24日改正

(設置)

第1条 フェリス女学院大学学則(1965年4月1日制定)第42条の2の規定に基づき、フェリス女学院大学(以下「本学」という。)にボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

(趣旨)

第2条 この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第3条 センターは、本学の教育理念である“ For Others ”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

- (1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項
- (2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項
- (3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

(センターの施設)

第4条 センターは、緑園キャンパスに置く。

(センターの構成)

第5条 センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という)、センター職員及び学生スタッフを置く。

(センター長)

第6条 センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

- 2 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 3 センター長は、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

(コーディネーター)

第7条 コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

- 2 コーディネーターは、事務嘱託1名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。
- 3 コーディネーターは、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

(センター職員)

第8条 センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

- 2 センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

(学生スタッフ)

第9条 センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

- 2 学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。
- 3 学生スタッフの活動期間は原則1年とし、再任を妨げない。

(委員会)

第10条 センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

- 2 委員会に関する事項は、別に定める。

(その他の事項)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第12条 センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2003年3月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年5月17日から施行し、2007年4月1日から適用する。

附 則

- 1 この規程は、2015年4月1日から施行する。
- 2 改正前の第4条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附 則

この規程は、2016年4月1日から施行する。

ボランティアセンター運営委員会規程

2015年3月11日制定
2017年3月10日改正

(趣旨)

第1条 この規程は、ボランティアセンター規程(2003年1月23日制定)第10条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という)の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

(委員会の構成)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

- (1) ボランティアセンター長(以下「センター長」という。)
- (2) 各学部から選出された教員 各1名
- (3) 教務部長
- (4) 学生部長
- (5) 国際部長
- (6) 宗教主事
- (7) 大学事務部長
- (8) その他委員会が必要と認めた者

2 委員の任期は、前項第1号及び第3号から第7条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第2号に掲げる委員については2年、第8号に掲げる委員については1年とし、再任を妨げない。

(審議事項)

第3条 委員会は、ボランティアセンター(以下「センター」という。)の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

- (1) センターの運営方針に関する事項
- (2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項
- (3) センターの日常業務の指針に関する事項
- (4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

(運営)

第4条 委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

- 2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。
- 3 委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度1回開催するほか、臨時委員会は、必要であると認めたときに随時招集する。
- 4 委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

(議決の方法)

第5条 委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

(記録)

第6条 委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

(報告)

第7条 委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

(その他の事項)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

(庶務)

第9条 委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2017年4月1日から施行する。

【運営方針 ～大学の理念とボランティアセンター～】

“For Others”の精神のもとで「自立した女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003年度から「ボランティア活動1, 2, 3」が単位化されました。

1. センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。

2. センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。

3. センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。

4. センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。

5. センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。

6. センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletterの発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につながってゆくことを、また大学が、社会的

な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

(2 0 0 3 年 4 月 確 定)

アンケート結果（ボランティアセンター来訪者）

2022年度、ボランティアセンターを通じて情報収集や相談を行った学生総数（実数）はオンラインを含めて63名となった。ボランティアセンターでは、初回来訪時に相談票に記入をしてもらい、聞き取りを行い、相談内容を記録している。以下のグラフは相談票に基づいて集計している。

図1 ボランティアセンター訪問者数（学科別）

単位：人

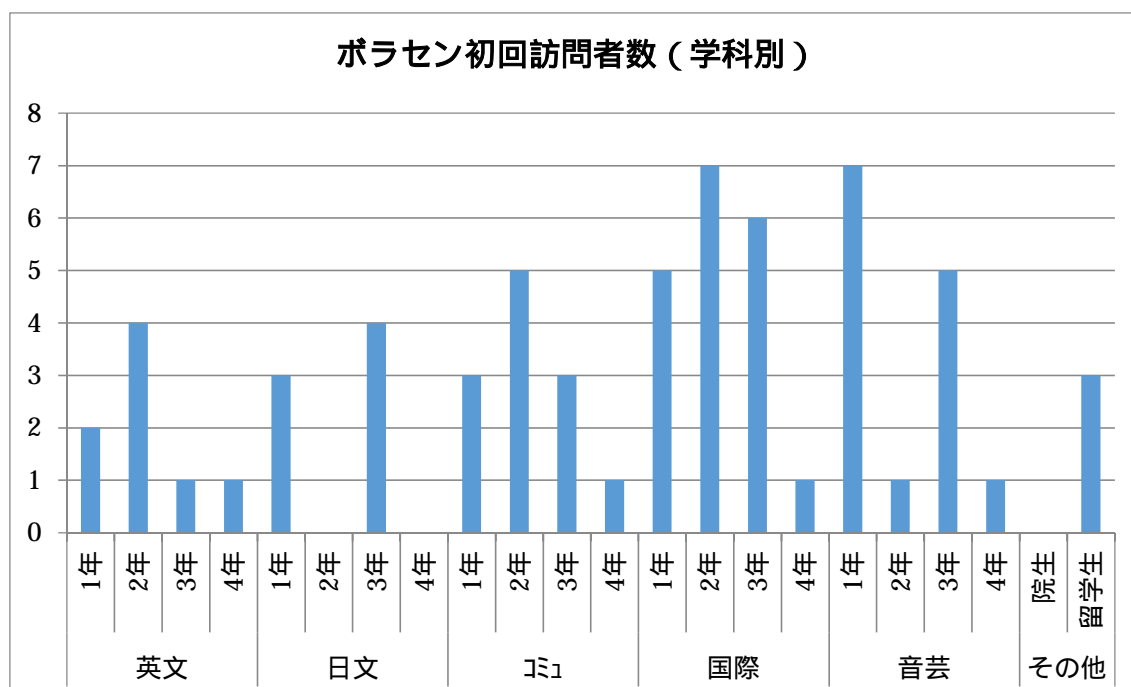
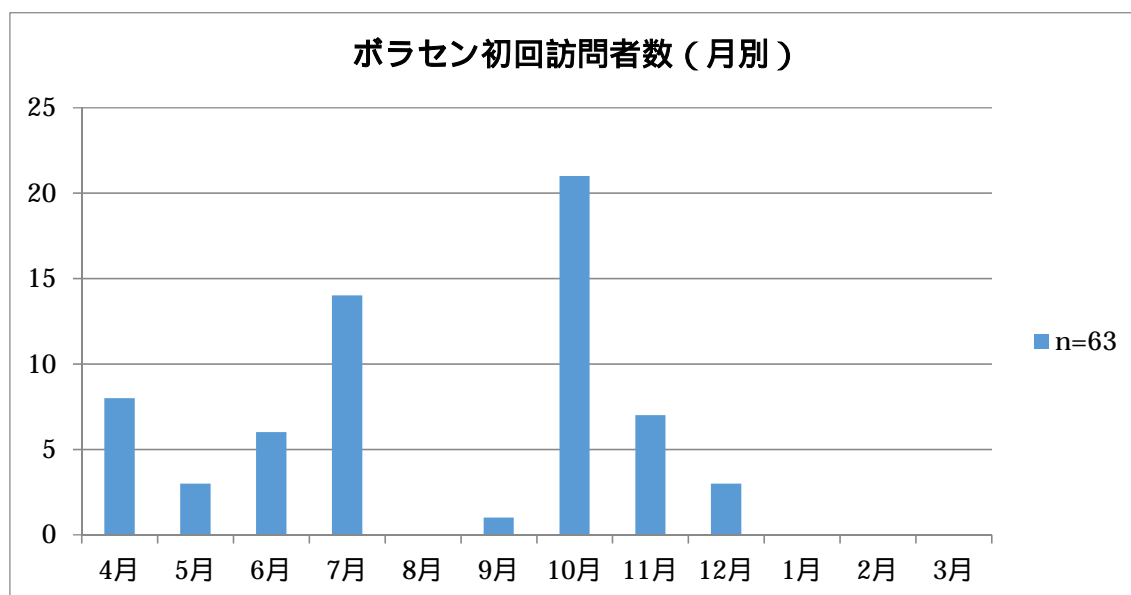


図2 ボランティアセンター訪問者数（月別）

単位：人



今年度の学科別来訪者数の傾向は、国際交流学部が全体の約 32%（前年度は 28%）、文学部が 45%（前年度は 44%）、音楽学部が 23%（前年度は 28%）と、前年度とあまり変化が見られなかった。

月別数では、4 月と 10 月にそれぞれ新入生説明会、ボランティア講習会を実施しているため、来室者数が増えている。

関心のある分野については、国際協力、国際交流は例年並みに関心が高く、その他に今年度は多文化共生、文化・まちづくりも関心が高い傾向であった。

図 3 関心のある分野について

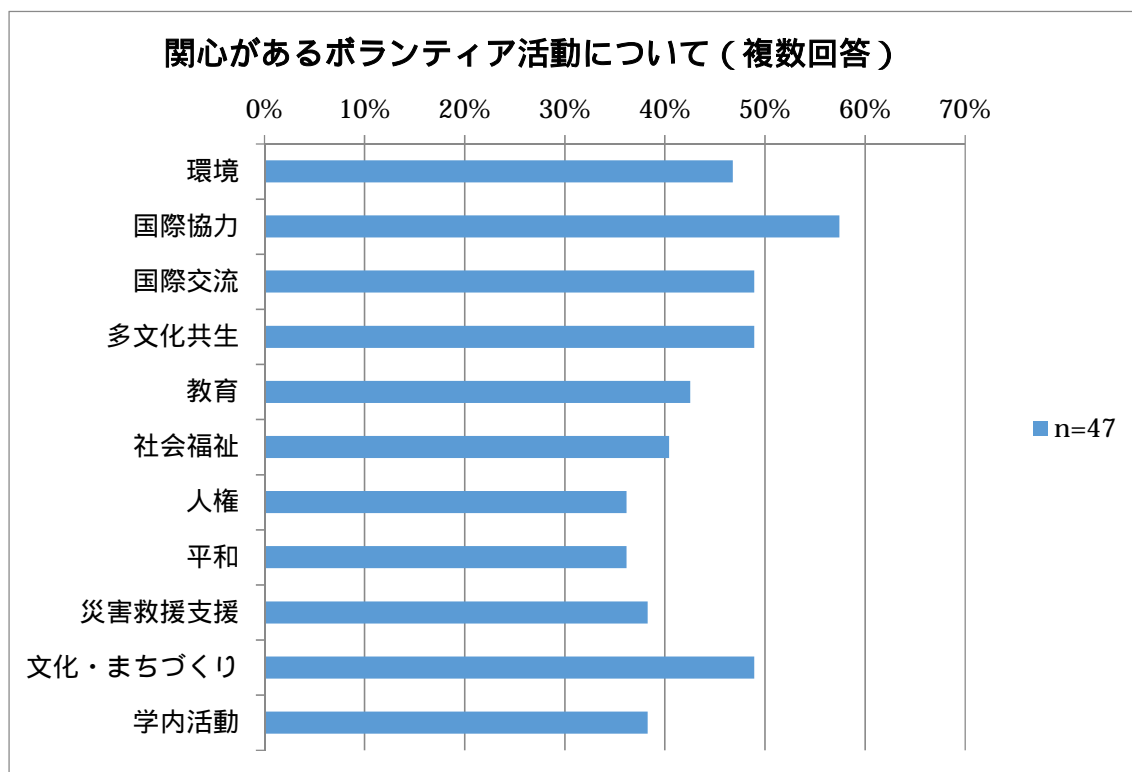


図 4 国際協力分野の内訳（複数回答）

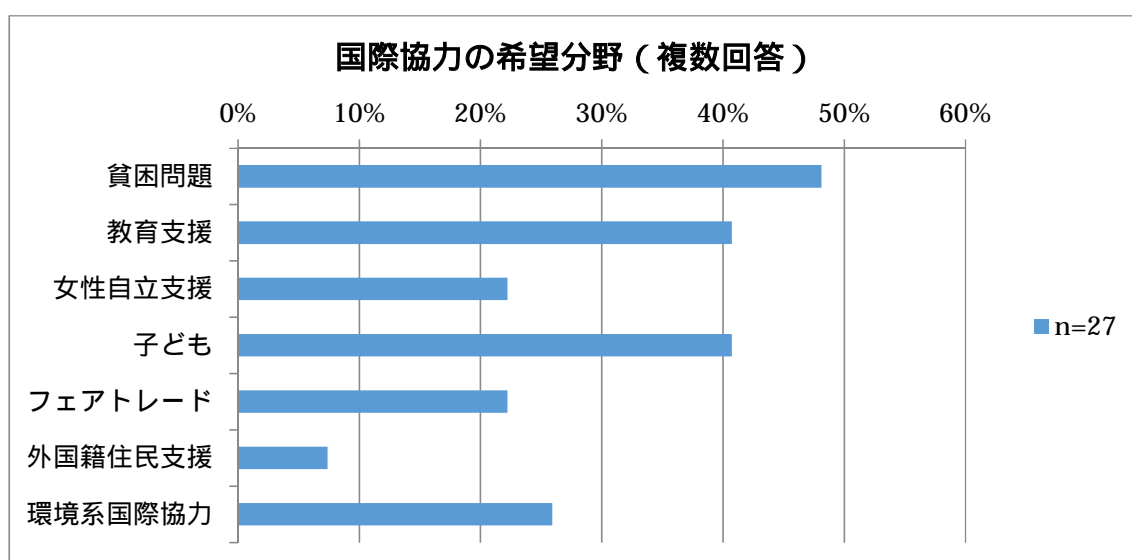


図5 国際交流の内訳（複数回答）

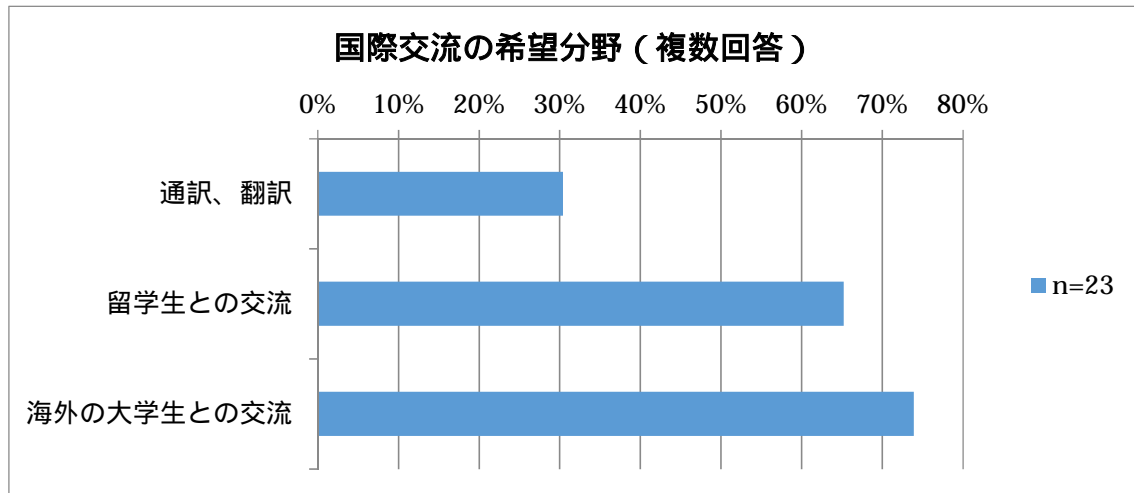


図6 多文化共生の内訳（複数回答）

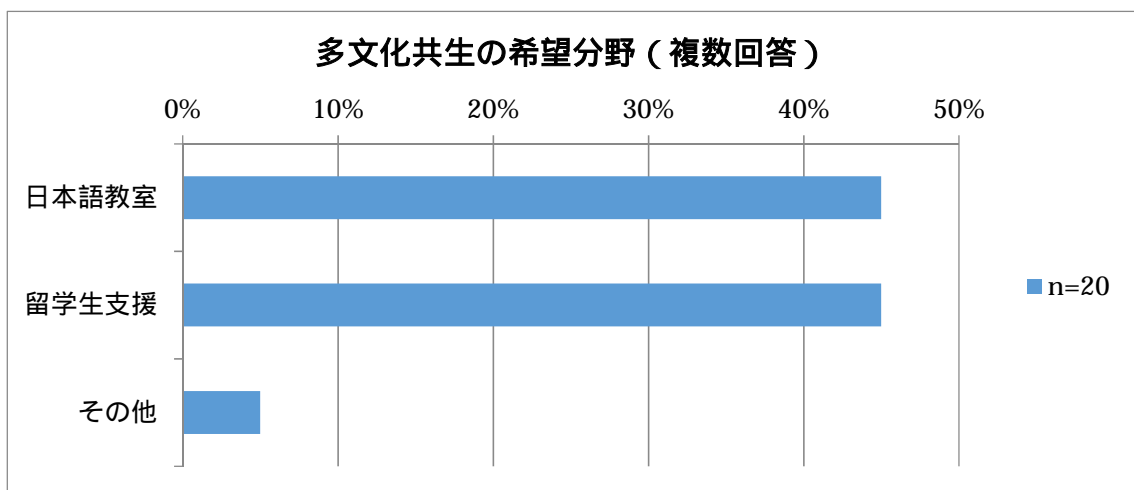
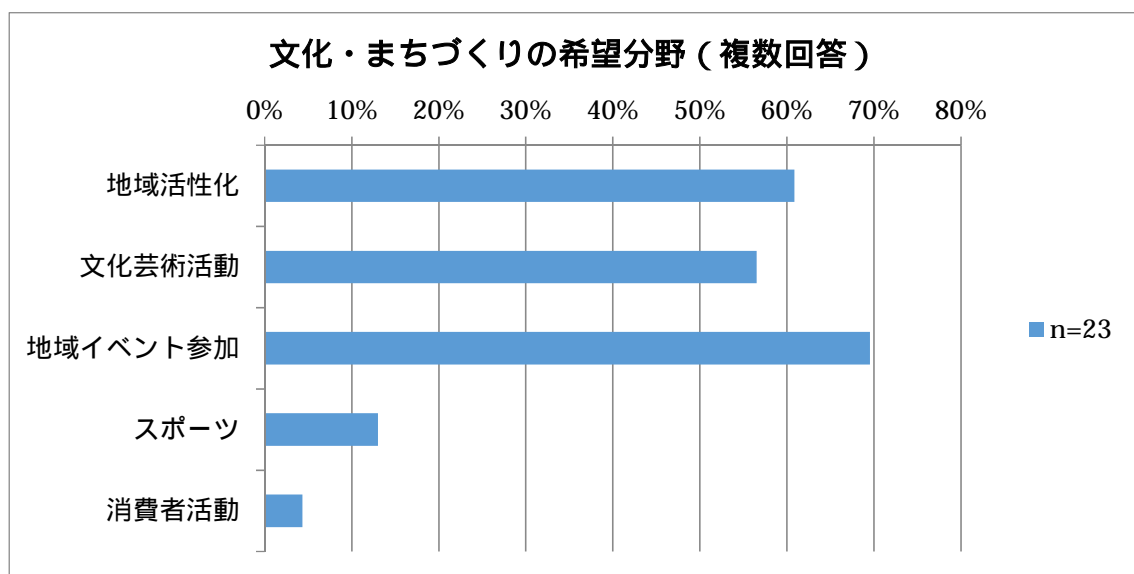


図7 文化・まちづくりの内訳（複数回答）



2022 年度ボランティア説明会 実施報告

春のボランティア説明会

第1回 4月4日(月) 16:05~16:35 (Zoom) 参加者数 52 名、アンケート回収数 15 名

第2回 4月5日(火) 11:00~11:30 (Zoom) 参加者数 53 名、アンケート回収数 10 名

今年度もバリアフリー推進室と合同でオンライン実施(参加者は新入生が中心)。

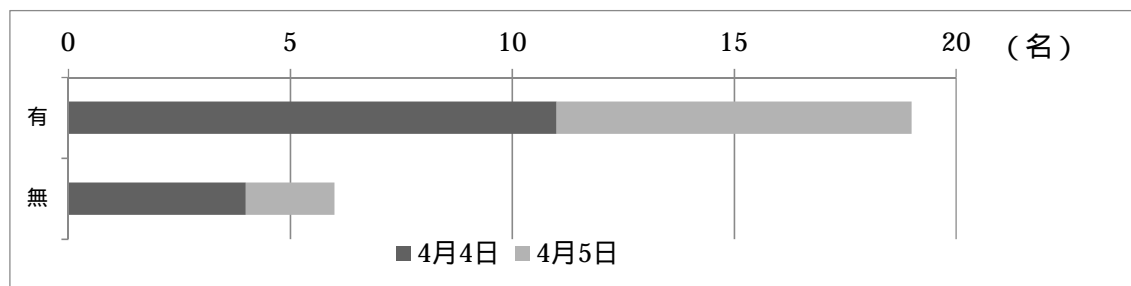
秋のボランティア説明会

11月21日(月) 12:20~13:00 (対面/Zoom) 参加者数 5 名

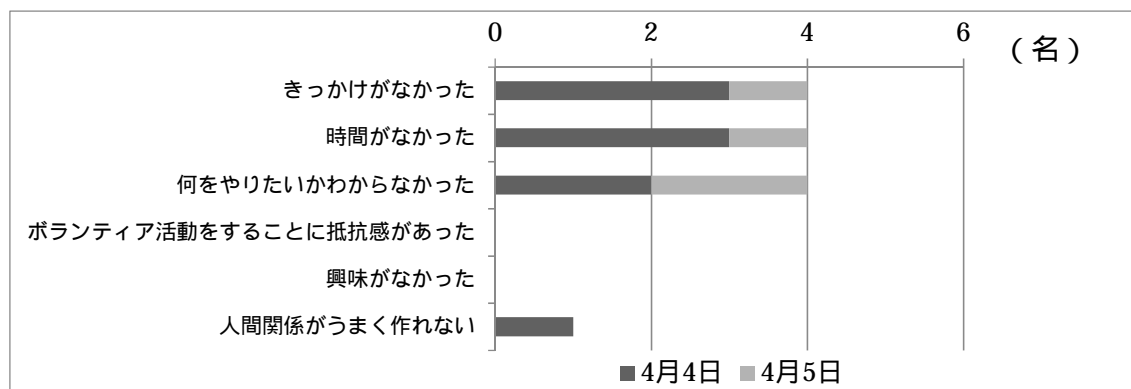
実施日	学年	英文	日文	コミュ	国際	音芸	学年別計	回収数計
4月4日	1年	2	3	4	6	0	15	15
	2年	0	0	0	0	0	0	
	3年	0	0	0	0	0	0	
	4年	0	0	0	0	0	0	
4月5日	1年	2	3	3	1	1	10	10
	2年	0	0	0	0	0	0	
	3年	0	0	0	0	0	0	
	4年	0	0	0	0	0	0	
合計		4	6	7	7	1	25	25

【春のボランティアセンター説明会アンケート回答結果】

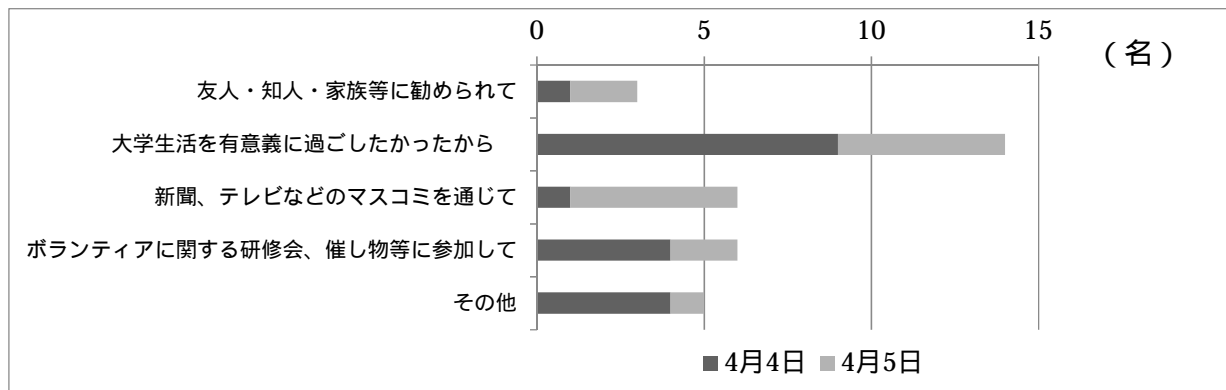
1. 今までボランティア活動をしたことがありますか？



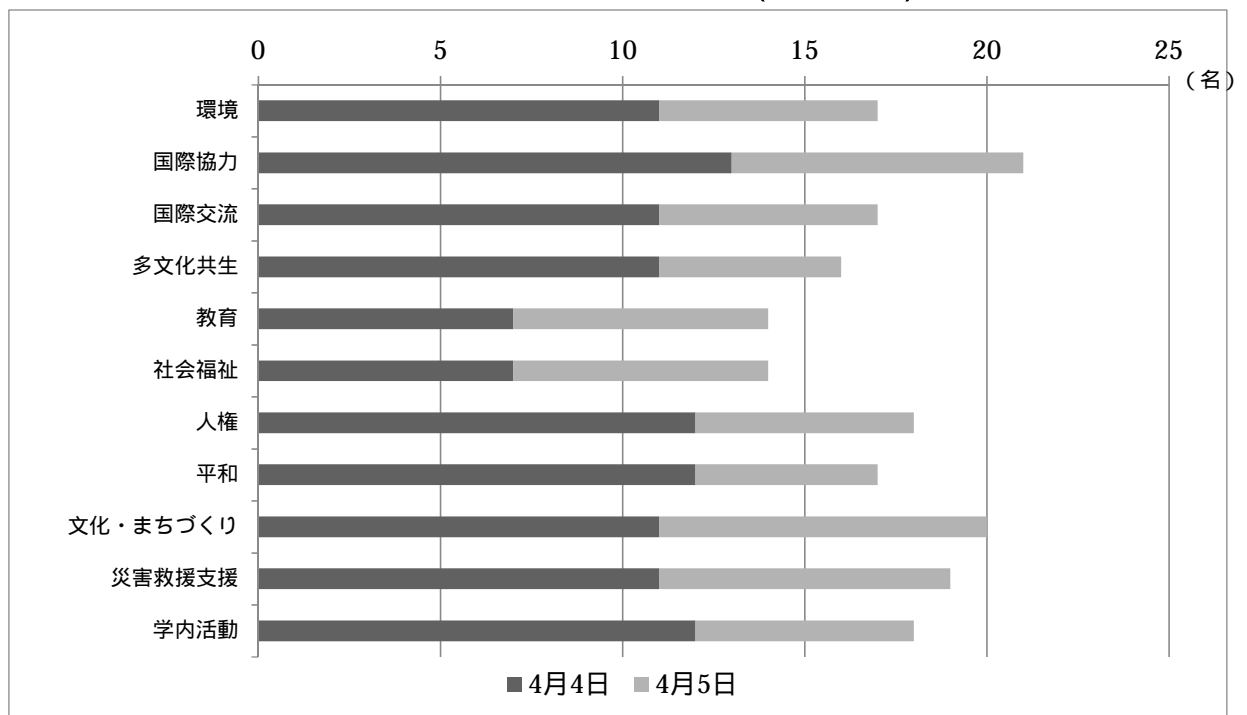
2. (ボランティア経験無の方へ) これまで活動の経験が無かったのはなぜだと思いますか？



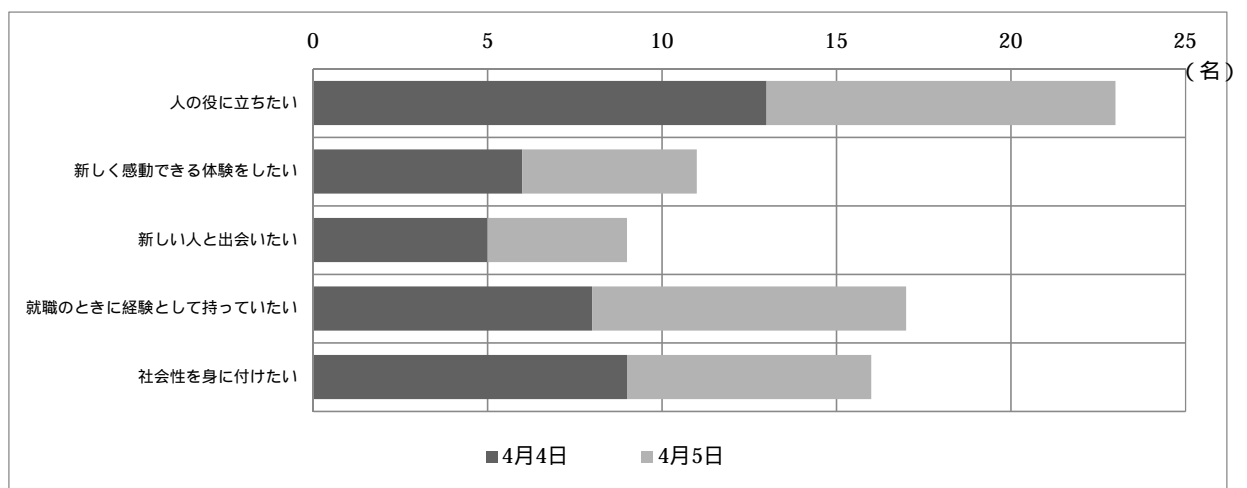
3.今回ボランティアをやってみようと思ったきっかけは何ですか？



4.どのような分野でボランティア活動してみたいと思いますか？(複数回答可)



5. ボランティアを通じて期待することは何ですか？(複数回答可)



2022年度ボランティアセンター活動実績

<前期>

- 4月4日(月)、5日(火) ボラセン・バリフリ合同説明会(Zoom開催)
- 4月25日(月)~28日(木) ボランチ開催
- 5月21日(土) 演奏ボランティア@だんだんの樹
- 6月22日(水) アンネのバラ記念礼拝(対面/ライブ配信)
- 6月18日(土)~19日(日) 学校法人アジア学院スタディツアー
- 6月18日(土) 第1回学生スタッフ研修会(農業体験)
- 7月20日(水) 学生スタッフ委嘱状授与式
- 7月20日(水) 5限授業「ボランティア論」ゲストスピーカー
- 7月27日(水) ボランティア活動科目履修相談会
- 8月8日(木) 演奏ボランティア@だんだんの樹
- 8月15日(木) 横浜市民防災センター訪問
- 9月24日(土) 第2回学生スタッフ研修会(Zoom開催)

<後期>

- 10月25日(火) ペットボトルキャップの学内回収
- 10月30日(日) 横浜マラソン2022ボランティア参加
- 11月5日(土)、6日(日) 大学祭参加(ボラセン動画紹介展示)
- 11月21日(月) 秋のボランティア講習会(対面/ライブ配信)
- 11月22日(火) アンネのバラ植樹記念礼拝(対面/ライブ配信)
- 11月24日(木) アンネのバラ2株学生スタッフにより新たに植樹
- 11月24日(木)~30日(水) 履修相談会@ボラセン
- 11月26日(土) ジョイントコンサート@横浜緑園高校
- 12月10日(土) 演奏ボランティア@めぐみ幼稚園
- 2月15日(水) アンネのバラ育成講習会
- 2月17日(金) 学習支援ボランティア活動ふりかえりの会

おわりに

コーディネーター 上條 直美

2022年10月より、フェリス女学院大学ボランティアセンターにコーディネーターとして着任しました。以前、2014年から3年ほど、コーディネーターとして働いていましたが、介護離職し、この度再びコーディネーターをさせていただくことになりました。当時は2011年の東日本大震災・福島原発事故後ということで、福島の子どもたちのための保養プログラム「サマースクールプログラム@横浜」を実施しており、学生の熱心な取り組みから多くを学んだことがとても印象に残っています。その他にも横浜・寿町や戦後70年(2015年)の機会に歴史を学んだり、さまざまな場所へ一緒にフィールドワークに訪れました。

私が社会活動に興味を持つようになったのも、やはり大学生のときでした。「現場」に足を運んで、自分の目で見て感じた経験は大きく自分の人生に影響を与えました。ボランティア活動の大前提には、社会をしっかりと見ること、何が課題か、自分はその中にどう位置づけるのかを考えること、そして他者とどう関係を結んでいくのかを学ぶことが必要です。そのためのさまざまな活動がボランティアセンターでは可能で、魅力のひとつでもあります。少しでも多くの機会を提供することを目指しています。

コロナで活動が制限された間は、オンラインでさまざまな工夫をしながら活動を継続させていたそうです。前コーディネーターやセンター長、職員、学生スタッフの皆さんのご苦労と創意工夫には敬意を表したいと思います。

2022年度後半は、徐々に通常運転に戻りつつありましたが、まだまだ本格的な活動とはなりません。自由に活動できなかった時期に、学生の皆さんは何を考え、何をしていたでしょうか。

2023年度、どこまで制限なく活動してよいか、試行錯誤の部分もあります。それでもこの時期を前向きに捉えるならば、改めて For Others とは何か、ボランティアの意味とは何か、ボランティアセンターの場所としての意味は何かを考える良い機会になると思います。ボランティアセンターに所属する学生スタッフの本来の役割もコロナで非常に制限されていました。先輩から活動について引き継ぐ機会もなく、経験の継承というものが困難になったのもコロナの負の側面のひとつです。

2023年度にボランティアセンターは20周年を迎えますが、初心に戻り、新たな歴史を創る一步を踏み出したいと決意を新たにしています。

2022年度 フェリス女学院大学 ボランティアセンター年間活動報告書

発行 2023年9月1日

発行・編集 フェリス女学院大学 ボランティアセンター

〒245 - 8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 緑園キャンパス CLA 棟 2F

TEL:045-812-8462 FAX:045-812-8467

<https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/news/>

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売することを禁じます。



フェリス女学院大学ボランティアセンター

